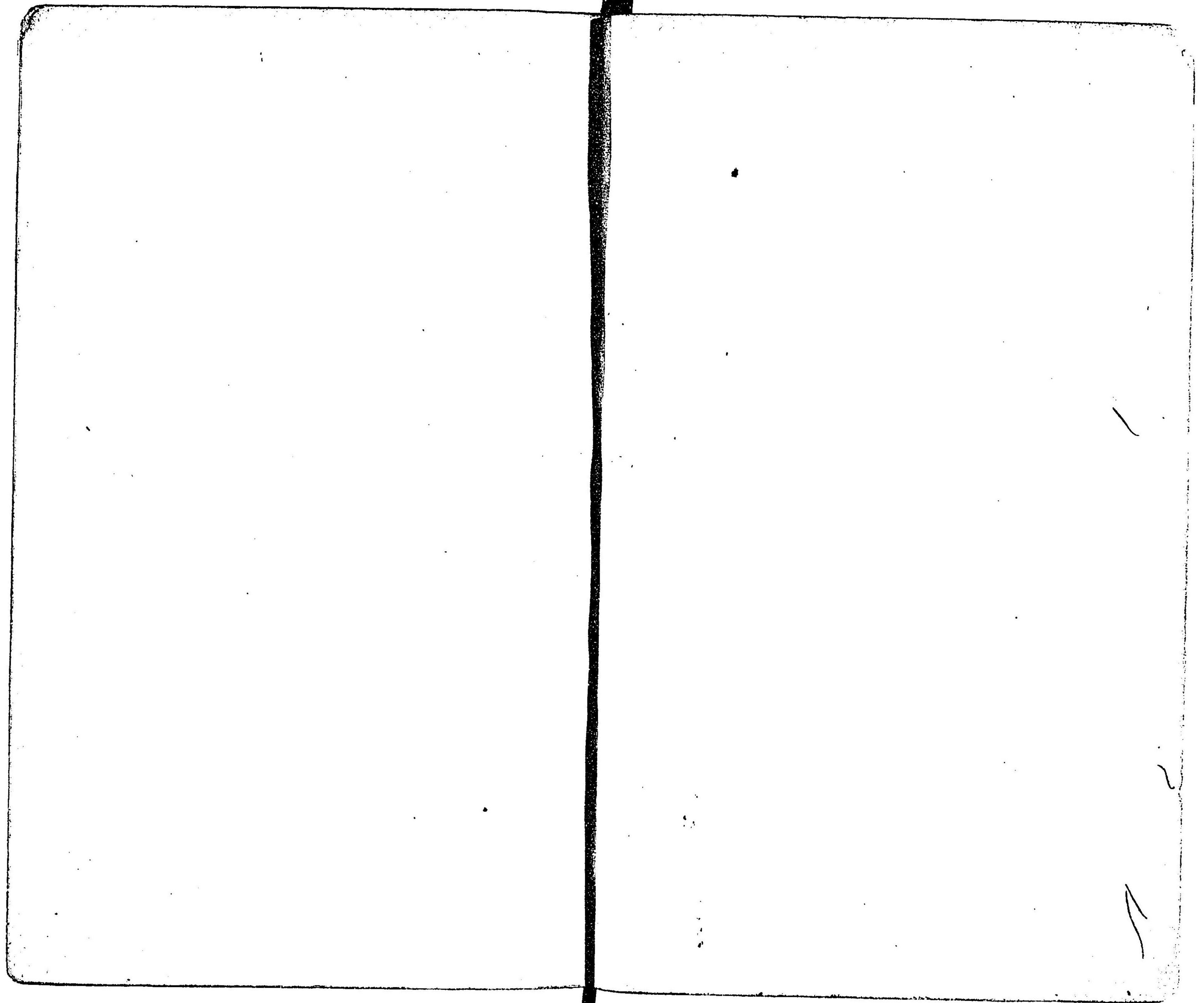


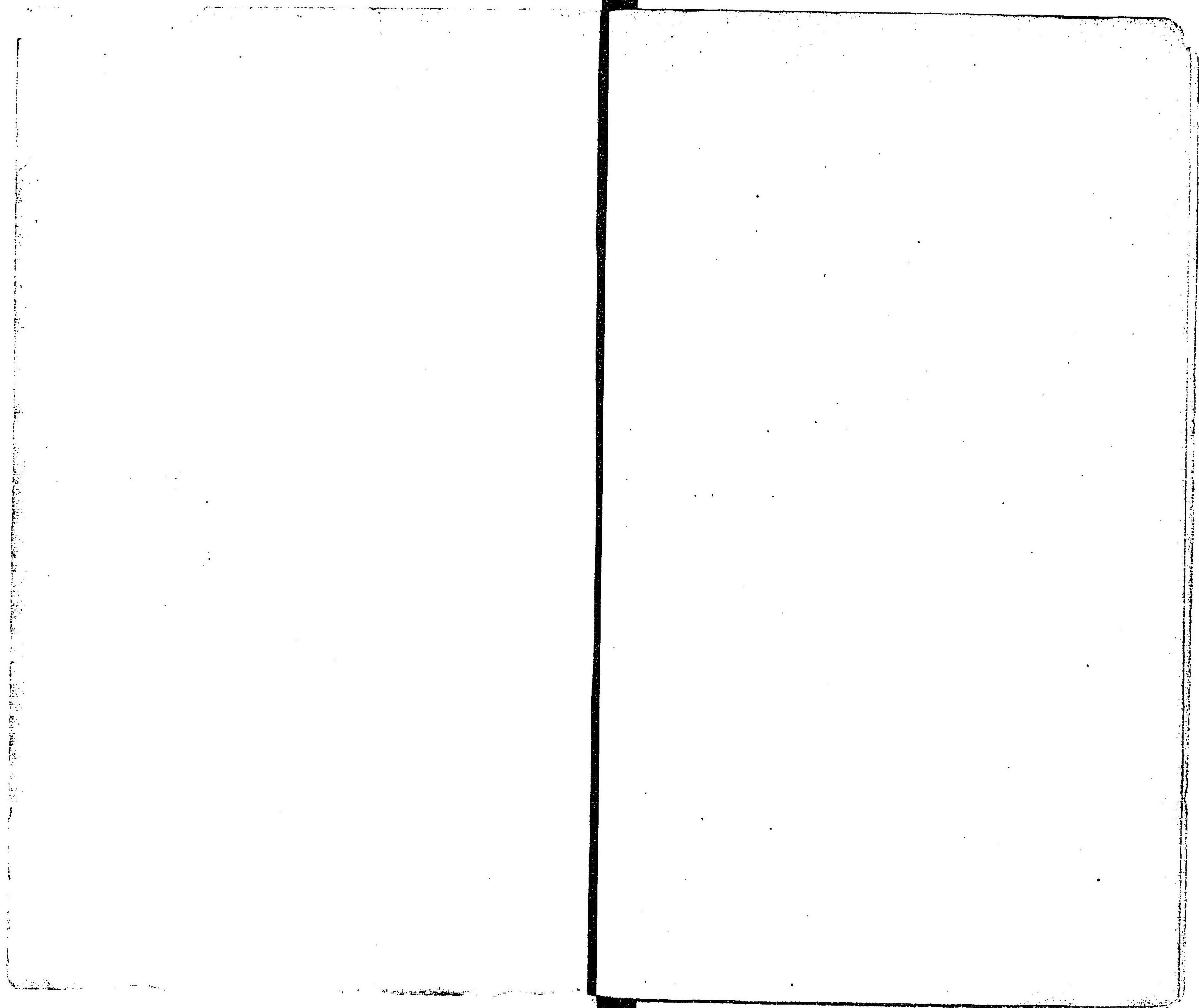
824

152

素人宗教觀







324-152



素人宗教觀

明治
42 10 7
内交

序 文

過日未知なる石橋臥波君なる人が余を訪はれて、其著「鬼」と題する既刊書と「素人宗教觀」と題する未刊書を贈られ、而して、其「素人宗教觀」に就て、何ぞ一言せよとの事であつた、そこで、其書は如何なる事を論じたものである乎と思ひ、先づ通讀して見たところが、頗る面白い、其主義は全く自然觀であつて、殆ど超自然力を認めないように見える、尤も余にも多少反對せねばならぬ點が無いでもないけれども、併し先づ吾が意を得たものであると考へて、頗る愉快に感じたのである、但し其書名に就ては余に聊か意見がある、此の如き無宗教的の書にも猶宗教觀なる題を附するのは、甚だ當らぬ

ではない乎、寧ろ「自然觀」杯いふことにしては如何にや、けれども尙再考すれば碩學エルンスト、ヘツケル博士が「自然的宗教」(Natürliche Religion)と唱ふるものは粗此書の如き主義のものを指すのでもあらう、して見れば、それに倣うて宗教觀の字を用ふるも強ち當らぬことでもなからう乎、兎に角それ等の事は余の大に論ぜんとする所ではない、唯余は本書の内容大體に就て多大の賛同を表するのである。

明治四十一年九月

加藤 弘 之 述

緒 言

一、今の世に、宗教を説き、哲學を論ずる者は、物質主義の旺盛にして、精神修養の衰へんとするを慨嘆する餘りに出づる者多し。さり乍ら、そのいはゆる宗教なるものは、多くは、古來より傳はれる佛教とか、耶蘇教とかいふ如き既成の形式的のものにして、その信仰とは、從來の神佛の實在を信じて、之に投託することをいへるものなれば、時代といふものとは調和せられざるものなることは、誰も心づくところなるべし。

予輩は、もとより今日の物質主義を崇拜する者にあらず。また精神主義に心酔する者にも非ず。要は智と信との調和をはかり、時代に適切なる信仰を立て、これを中心として、この世を渡らんとするものなり。故に予輩がいふ處の信仰は、從來宗教家

のいはゆる信仰にあらず。宗教とてもまた從來のいはゆる宗教にあらず。いはゆる素人的の宗教にして、素人的の信仰なり。而して、その素人たる本質は、今の時代に生れて、今の時代の學問をなし、今の時代の社會に交はりて、今の時代を活動の舞臺とする人間、一言にしてつくせば、常識ある現代の人間なり。

一、この稿を草するに至れる因縁は、實に今より數年前にありしなり。當時、予は、同郷の土常光得然君と居を同じくして、同郷の先輩富士川游氏の隣に在り。常光君は固より宗教家なり。つぎて、靈魂論の著者たる妻木直良君亦宗教家の縁を以て、こゝに來る。日々首を鳩めて談ずる處は、宗教の外に出でず。來訪する者亦多くは宗教家なり。曰く柴田徹心君、曰く寶閣善教君、曰くその他何々。而して予と富士川氏とは、素人なり。一方が佛

説を云々すれば、一方は、心理學、社會學を以て云々する。而も富士川氏の佛典に通ぜる、中々素人に非ず。只予は、佛典に通ぜず。更に聖書を讀まず。而も朱に染まれば赤くなりて、いつの間にか宗教の臭味が衣に染みこむに至れり。されども、如何にしても、從來の宗教家のいふ所は、予が信ずる能はざるところ。こゝに於いてか、予は遂にあらゆる學問の結論を取り集めて、その上に自己の信仰を立つる必要を見出したるものが、抑々この稿を書くに至れる所以なり。

一、稿を草するに及びても、その名は未だ定まらざりしなり。たまく、富士川氏の、素人の宗教論なれば、素人宗教觀こそ適當ならめとの一言は、遂にこの書の命名となりて、今こゝに初めて、うぶ聲をあげて世に出づるに至れるなり。

一、もしもこれこの書が、果して世の素人たる士の信仰を立つるに資するところあるか否かは、著者の注文する處にあらず。如何となれば、信仰は人々の自由に定むべきところ、況して、面の異なると同様に、心の傾向が異なるものなればなり。

一、予が畏敬する加藤博士が、繁忙の裡に在りて、予が爲に、この稿閱讀の勞を吝まず、序文を辱くせるは、深く感謝する處なり。

一、予は終りに臨み、同郷の先輩富士川游氏が、常に予を誘掖してある信仰を立てしめられしを謝し、併せて、多くの知友が、直接間接に、予を指導せられしを謝す。

明治四十二年秋季皇靈祭の日

著者誌

素人宗教觀目次

序説

- 一 人間の運命……………
- 二 宇宙の神怪……………
- 三 世渡の案内……………
- 四 信仰の本質……………
- 五 信仰と宗教……………
- 六 宗教の起原……………
- 七 宗教の本質……………
- 八 時代と宗教……………
- 九 宗教界の謎……………

十 謎の解決の態度

10

本 論

20

謎の解決

21

第一問 神佛の本體

24

甲 世界の發生(附註)

24

乙 生物の發生

25

丙 生命の根原

25

丁 生物の進化

26

戊 自然に於ける人類の位置

26

己 總 括

27

第二問 人間の本质

28

甲 人間の身體

28

乙 人間の精神(一)

28

丙 人間の精神(二)

29

丁 總 括

29

第三問 人間の運命

30

甲 社會の組織

30

乙 社會心

31

丙 總 括

31

第四問 靈魂の本質

32

甲 靈魂の意義

32

乙 靈魂の不滅

33

結 論

34

一 宇宙觀(一)

34

目 次

二 宇宙觀(二).....	二
三 人生觀.....	二六
四 最後の信仰告白 所謂素人宗教觀.....	三三
附 録.....	四二
靈魂問題.....	四四
我邦上古の靈魂說.....	四〇



期三の活生の人

ートラエフツサリ) イサルサ工に属るな名有の利本がてしにのるせ寫を期三の活生間人は此
りせ授に年五十八百六千一に年五百六千一和四はイサルサリなのるれなに筆の(才種と

序

說

世の中は喰うてかせいで寝て起きて

さてその後は死ぬるばかりぞ

(二 休)

世の中はたゞに坐頭の丸木橋

渡るこゝろで渡るべきなり

一 人 間 の 運 命

夜もやうく更けゆきて街頭には人聲もなく音するものは豚ばかり、犬の遠吠えに目を覺まされ寝ねんとすれども寝ねられず。右に左に寝返りすれば、冷き秋の夜風は、襖の隙より身に浸みて、枕頭の雨戸の隙からは、いと冴え渡る月の影さへ障子の紙にうつり、何となくさびしくもあり、静かにもあり、物悲しくも覺ゆるまゝに、先づ思ひ浮ぶるものは、この身の來し方行く末なり。——人間の運命なり。一たび呱呱の聲をあげて、この世に出て、人間の仲間入りをするれば、男となく女となく、幼より老に至るまで、朝に夕に營々として衣食に奔走し、孜々として智を研ぎ、業をはげみ、日もこれ足らざるが如くなるは、そもく何のためなるか。それすら一つの疑問なるに、吾等人間は、萬人が萬人悉く一様なる能はず、たけの高きと低きと、肥えたると瘦せたると、美しきと醜きとは、よし問はずとも、智者あり、愚者あり、はた、貧富貴賤の相異あり。而して、その生活の状態を察すれば、駟馬に鞭ちて臺閣に出入し、乾坤を掌の裡にめぐらし、一

序 説 一 人間の運命

たび怒れば、群僚色を失ひ、一たび笑へば、閨門忽ち春の如く、嘗て榮枯盛衰を知らざるものあり。あるは、金殿玉樓に、浮世の外の夢を貪り、嘗て老の將に來らんとするを知らざるあり。あるひは、兀々として手卷を釋てず、才なきにあらざ、學古今に通ずるも、世と相容れられず、不幸不遇の裡に身を終ふるものあり。方丈の室、晝すらなほ暗きところに、箕の如く背をかゝめて、白眼、他の世上の人を睥み見るもあれば、世渡る術の拙くして、彼岸をさして乗り出てし一家の船は、颶風怒濤にくつがへされんとし、仰げば一天、墨を流したらんが如く、一輪の月は妖雲に光りをかくされ、石炭の糧食すてに盡きて、妻子眷族の水手疲れば、智慧の磁石あれども方向を示すことあたはず、進むべからず、退くことも出來ず。

世の中を渡りくらべて今ぞ知る

阿波の鳴戸は浪風もなし

世は實にうき世なりけりと、かこつもあり。

昨日までは一家團樂、寝ぬるに室あり、喰らふに粟あり。坐臥出入、意のまゝに

して、折々の花、時鳥、月、雪を、妻と語らひ子と戯れしは夢なりしか。今朝は最愛の妻に先だたれ、乳を呼ぶ聲さへ蟲の息なる生兒を抱きて、涙にくるゝ者もあり。かゝる人間境涯のありさまを觀じ來れば、こゝに、人間の運命てふものは、果して人間自個の力にて左右し得べからざる者なるべきか。もしくは、自個の運命は、自個の作り出す所なるかの疑問に、接著するに至るべし。これを解くに、この世を以て、安樂の境涯なりとし、あるひは、憂き世なりとするは、人々の心次第、あきらめ次第、さらばとて、煩悶に短氣を起して、淺間山頭一片の烟と化し去る者は、固より野暮の骨頂なり。如かず更に進んで、自個運命の由つて來るところをたづぬべし。必ずや、一條の光明、汝の前途を照らすものあらん。

二 宇宙の神怪

人間境涯をたどり來る者、一たび運命てふことを疑ふに至れば、この疑問は、更に進みて、吾ら人間のこの身體は、如何にして、出て來りしものなるか。況して

吾ら人間の心といふものは、元來如何なるものにして、吾らが、かやうに生きてある間は、肉體の中に宿るにしても、一たび生活の機能が止みじ後は、如何になりゆくものなるべきか。「ミイラ」にすればいざ知らず、死したる後の肉體は、腐れてもとの土となるに、心もそれと同様に消えて無くなるものなるか。元來、身體といひ精神といふものは如何なるものなるべきか。この身が死んでも魂だけは、生きて居て、またも、この世と同様に、天上にあれば、地下にあれば、た空間の何れにあれば、生活するものなりとせば、この世の苦痛を早く逃れて、安樂の境涯にゆかぬが損、もし然らずして、只跡方もなく消滅するものならば、一時間にも、永くこの世に生きながらへた方が益などと、さまざま、心を痛むるに至る。こゝに至れば、すでに疑問は、大なる問題に接觸し來れるものにして、生とは何んぞ。死とは何んぞといふこと、引いては、そも、物質—身體と、精神—心とは如何なるものにして、如何なる關係あるものなるかといふことに觸れ、いはゆる宇宙問題に接し來れるなり。

更にこれらに關聯して、少しく眼を外部に向けて、日々人間の周圍に起りつゝ、

ある自然の現象、風、雨、雷霆、寒來暑往、晝夜四季の變化より、自然のまゝなる日月星辰、山川草木のさまを視るにつけても、彼等は、人間の如く精神なくして、たゞあるべきやうに動きつゝあるものなるか。これらの物と、人間の身體、精神とは、全く縁の無きものなるか。若くは、何處かに共通の處は無きか。もしも、この宇宙は神が造り出せるものならば、如何なる考へにて、かく、さまざまの區別を立て、造り出せるか。もし、又、自然に出來たとするも、如何やうにして、現在に見ゆる如きものが出て來りしかなど、一たび何故にの疑問を起さば、まるで、魔術師に目をくらまされたるが如く、長夜の夢を見る心地して、忽然として、宇宙の廣大神怪に驚き、不思議の感に打たるゝを覺ゆべし。

これらの問題、いひかふれば、宇宙が吾ら人間に向つて示しつゝあるこの不思議の謎を、如何にもして解かざれば、とても、人間の運命も、この身の來し方も、心のゆく末も、解釋が出來ざるのみか、本心より安心が出來るものにあらず。さればこそ、幾千年の昔より、この謎を解かんとして、我も人も、思ひ思ひの解釋に力を盡せども、なほ全然解決すること能はず。エミール、デュボア、レーモンは、か

序 説 三世渡りの案内

つて宇宙の七不思議を數へ來りて、之が説明を試みしも、遂にその中の四つは、
解くこと能はずといへり。借問す。人間果してこの謎を説く力なきか。
宇宙本來かくの如く不可思議なるか。詮じ來れば、

幽靈の正體見たり枯尾花

の類には非ざるか。さりとても、もしこの謎を解く能はずは、如何にして、この
世を渡ることを得べきか。

三 世渡りの案内

一すぢにもひ定むる心だに

あらばうき世を嘆かざらまし

朝に寢床を離れてより、夕に床に入るまでの心の中を、我れと我れから省みれば、一舉手一投足ごとに、楽しい苦しいの感を伴はざるはなく、ある時は、この世が厭になり、華嚴の瀧に身を投げんと覺悟し、ある時はこの世を安樂の境涯と觀じ、一日にても長くこの世に生き長らへんことをねがふ。所詮人間は感情

的のものにして、人生―人間の境涯といふものは、この嬉しい悲しい、楽しい苦しいといふ感情が、珠數の玉の如く連続したるものにて、これあるによりて、吾等の境涯―人生は、生命もあり、何らかの目的もある如く思はるゝなり。されども、感情は、時々刻々に移り變るものなれば、これのみにては、とても、この世を渡り行く杖や力になるべきに非ず。況して苦しみの感じのみ強くなりて、この世が厭になるときは、最早、人生―生命が無くなりしものにて、やがては、この世と離れ、この境涯を捨てざるべからざるに至り、遂には、天に上るか、山に入る外なかるべし。しかも、ある人が詠みたりし歌の如く、この世が憂しとて山に入る人、山も亦物うくなりたらんには、何地にゆくべきか。はては死するより外はなかるべし。

然らば、人はその時々、心の中に起る、かうしたい―欲しいと云ふ意欲―意志の欲望といふものに打ちまかせて行かばよきか。意志の欲望といふものは、實際の無きものにて、シヨッペンハウエルが言ひし如く、全く盲目的にして、足ることを知らざるが故に、もし之にのみ打ちまかする時は、世の中は、我が思ふ

まゝに、何事も求め得らるゝものに非ざれば、苦痛のみ多くして、果ては、世界は苦しみと罪とに充たされたる場所の如くなるに至るべし。

さらば、感情にも倚らず、意志にもすがらずして、知慧の光明―力を頼みとして進まんか。日々、身邊に起る事柄を見るにつけても、疑ひのみ多くして、とても安心することの出来ざるは、必然なり。

此に於いてか、考ふれば考ふるほど不可思議なるこの世界に生れ出て、複雑にして、競争はげしく、我が一人の思ふまゝにならざる、この人間社會の中に生活せんには、鰯の頭に信心をこめ、彌陀の袂にすがるにせよ。誠の神にたよるにせよ。若しくは、人間の本心―理性の指導する所に従ふにせよ。何らか、悟りあきらめて安住するといふことが無くしては、叶はざるべく、この悟りあきらむることが即ち信仰にして、これあるによりて、始めて、うきふし繁きこの世の中を渡りゆくことを得るなり。こゝにいはゆる信仰が、やがて世渡りの案内にして、これが、實に宗教といふものゝ骨髄なり。

さはあれ、このいはゆる世渡りの案内たる信仰は、人々によりて、その素性を異

にし、時としては、迷信に陥るものすらあれば、よく近く自己の心の中を省み、時代の状態を察し、これならば、己れが一生を打ち任せても氣遣ひなしと思ふところを見出して、これに頼るべし。この時代に適したる正確なる案内者を見出すが、即ち素人宗教家たるものゝ目的とする所なり。

四 信仰の本質

夜があけて働き、日が暮れて慰ひ、井を掘つて飲み、田を耕して食ひ、かくして、何の不自由もなく、昨日と過ぎ、今日と暮らして、明日は何を爲んとも思はず、たゞその時のゆきなりに任せて、日が西より出づるとも、月が東より昇るとも、そんなことには一切頓着せざるものあり。朝に一臺の車をひいて家を出て、客を乗せて坂路にさしかゝれば、汗は雨の如く雫となりて滴る。この時、彼はこの世の苦しみの淵なることを悟り、やがて、夕べになりて、思はず囊中を肥やして家に歸れば、家婦は心ばかりの料理に、晩酌の用意をして待ちつゝあり。子供は、街路に出て、轎に手をかけ、嬉しげに迎へて家に歸る。晩酌の酌がまはる

とともに、人生觀も車の輪の如く、次第次第に樂天的にかはりゆく。今日かくの如くにして過ぎ、明日も亦かくの如くにして送り、苦々樂々の外に何の考もなくして、遂に一生を送るもあり。これらの者は、信仰も何もなく、殆んど他の動物と異ならざるが如く見ゆれども、その日／＼のゆきなりに安んじて働くところに、一種の悟りがある譯にて、これを無意識の信仰とも名づくべし。更にまた、自らこの世の中に奮闘し來りて、經驗の上より人生觀を立て、あるひは、古老の言を聞き、先人の跡をかながみて、世の中はしか／＼のものなりと、自己の運命を悟りて、この世を送る者もあり。これを常識的の信仰といふ。この常識的の信仰といふものは、俚諺、格言などとなりて、一般の人を指導しつゝあるものにて、比較的穩健にして間違のなきものなり。一例を擧ぐれば、

事足れば足るにまかせて事たらず

足らて事足る身こそ安けれ

この道歌は、要するに知足安分といふことをさとしたるものにて、もとより常識に基けるものなれども、中々に深き意味を含めることを知るべし。

さり乍ら、一かどの學問を修めて、心田を開拓したる者は、これら常識上の人生觀にては満足が出來ずして、更に一步を進めて、この世界や人間境涯の深き意味を考へて、一定の主義といふものを立て、これによつて、この世を渡りゆく。この一定の主義といふものが、即ち悟りにして、また信仰といふものなり。而して、この主義には、その人の學問の種類はた素質などによりて自ら異同あり。直接の經驗より出發して、何處までも事實を基とし、此より推理して、主義を立つるものは、科學的の信仰と稱し、物理學者、醫學者、天文學者など、世にはゆる科學者といはるゝ者の悟りなり。之よりは、更に廣くして、一部の事實にあらずして、世界の真相とか、人生の本質とかいふやうなる全體のことを研究して、主義を立つるものあり。これを哲學的の信仰といふ。これがいはゆる哲學者と稱する者の、宇宙觀、人生觀なり。予は、これらを統べて、廣き意義の信仰といふ。之に對して、神や佛といふ人間の智識以上のものが實際に存在するとなし、之に對して、何事も打ちまかせて、崇拜するものを宗教上の信仰と名づく。これ一般に信仰と稱するものにして、いはゆる狭き意味の悟りなり。この信

仰にも、その程度には、様々ありて、何事も、神や佛の力にすがり、入口には福の來るを招き、猫の床には、夷子、大黒その他、あらゆる神佛の御守札、朝夕神酒を供へて、柏手いかめしく幸運を祈るあり。更に、智識上より、迎りゆくにあらずして、感情の上より、人間以上のある者の實在することを感ずるものあり。之に反して、神の本體を智識の上より證明せんとするものあり。こゝに至れば、他の哲學上の信仰と相距ること甚だ遠からず。

かくの如く、信仰には、その内容さまざま、なれども、之を形式の上より観る時は、人間の心の全體が、その發達の程度に應じて、ある中心をつくり、て安定する態度が、即ち信仰にして、この心全體の安定といふことこそ實にこの世を渡る案内者たるなれ。世に主義といひ、信念といふも、要するにこの心の安定に外ならず。之を彼の凸面鏡にたとふれば、その度に應じて、何處かに燒點を結ぶが如し。その面の度の異なるは、やがて、心の發達の程度に比すべく、その燒點を結ぶ遠近の距離は、信仰の本質の相違に比すべし。かく論じ來れば、たゞ心全體の安定だにあらば、その内容は如何なりとも、更に

關するところなきか、て疑問は、必ずや起らざるべからざるところなり。然り。この疑問こそ實に吾等が深く研究すべきところなるなれ。乞ふ次に、この疑問に向つて如何に答ふべきかを見よ。

五 信 仰 と 宗 教

人間の精神は、外部よりの刺戟を受けて、之を知覺し、心象といふ食物となして、精神發達の基礎をつくる。之を知的作用といふ。感情とは、知的作用、意志作用の影響によりて、精神が興奮し沈靜する調子にして、恰も音樂に於ける音の調子に異ならず。意志作用とは、外界の事情に反應し、或ひは精神自個が内部より活動するはたらきをいへるものにして、およそ精神作用に關するものには、この三作用は必ず共働するものなり。

今、もし信仰の要素を分拆するに、またこの三作用より成れることを知る。その信仰の中心となれるものは、精神が撰定せるところなれば、知的作用にして、やがて精神が要求するところなれば、これを意志作用と見るべく、これに安定す

るこれ感情なり。而して信仰が人によりて異なるは、一は精神發達の程度の相違に原づくものにして、その程度は精神發達の基礎たる知識の相違に原因するを知るべく、一は、その人の素質が影響するものにして、之がために、或ひは知的作用の盛んなるあり。感情の盛んなるあり。或ひは意志の強固なるもありて、これによりて、信仰も亦その趣きを異にするを免かれず。

かく信仰の要素を分拆し、さて、宗教上の信仰は如何と願みれば、その信仰の對象たる神や佛の内容は、人間の知識の進歩につれて昔より漸次に變化し來れるのみならず、個人にありても、その知識の程度によりて、甚しき差異あるを認むべし。これ感情が主となれりといふ宗教上の信仰も、精神全體の作用なるからは、知識が其根底となることを證明するものなりといふべし。但し宗教的信仰の特色として、他の信仰よりも、感情の方面著しく加はりて、殆んど他の要素を支配し、之がために、その對象たる神佛の實在てふものは、人間の如く、意志ありて、喜びもすれば怒りもし、善を賞し、惡を懲す靈能あるものとせらるゝに至り、こゝに宗教的客體——いはゆる本尊てふものをつくり出すは、人間の、切

なる情に基くものにして、宗教を以て、人間の病的現象なりといふ者あるは、實にこれがためなるなり。

プラト氏は、その著宗教的信仰の心理説に於て、宗教上の信仰を論じて、信仰といふものは、對象の實在を信する精神の態度にして、その發達の次第を見るに、大凡三期に分つを得べし。即ち第一期は、恰も小兒が眼に見ゆるまゝの物の實在を信するが如く、輕しく信する時期にして、之を原始的輕信Primitive Faithと名づくべく、やゝ進みては、自己の知識に訴へて、完全正確と認むるところを信仰する、之を智的信仰Intellectual Faithと呼ぶ。更に知的信仰に満足すること能はずして、感情の方面より満足を求むるに至る、之を情的信仰と名づくべし。而して、第一期は、全然疑ふことなき時代にして、第二期は、懷疑によりて慰安を知識に求むる時代、第三期は、更に情の方面より、一切の矛盾を避けて、圓熟の境に達せし時代なりといへり。

プラト氏の説くところの、信仰の三階段は、實は精神發達の三期にして、最も圓熟せるものは、情的信仰なりといへるは、見方によりては、異論なかるべしと雖

も、予輩の立脚地よりすれば、知識が發達して、感情意志の作用と調和して、精神全體の調子が調ひ、ある中心に安定する態度こそ、實に圓熟の境涯に達せるものにして、この境涯に達するは、やがて精神全體の發達せる結果に外ならずとせば、何處までも、知識が基礎とならざる信仰てふものは無き理なり。かくの如く考察し來れば、宗教的信仰なりとて、別に他の信仰と質を異にするものに非ずして、しかく信仰にさまざまの區別を立つるの必要を認めざるに至るべし。これ實に素人宗教の由つて以つて出發點とするところ。先づ斷定を下すを止めて、須らく宗教てふもの、由つて起る所以を考察せざるべからず。

六 宗教の起原

人間は、その位置こそ他の動物の上位にあれ、一個の生物なるからは、自己を保存せんとする慾は、先天的に具有するものなれば、生れ出づるや、直ちに呱呱の聲をあげて叫び、教へざるに乳房をさぐりて、迸り出づる甘露の乳汁に舌鼓を

打つ。これすてに自然に備はれる自己保存の慾の發現なり。世に命あつての物種といふ諺は、實にこの自個保存いひかふれば、自分の生命を保ちゆかんとすることが、何よりも大切なる事をいへるものにて、如何に人間が萬物の靈長なりとて、生物なるからは、生命がなくては、如何ともすること能はざるべし。然るに、幾千万年の昔、この地球の上にあらはれ出でし原始人類は、恰も現在の小兒の如くにして、智識極めて蒙昧なれば、日々自個の周圍に起るさまざまなる自然の現象、雷が鳴る、大地が揺るぐ、日が出る、月が入る、風雨晴曇、四季の變化などを觀て、先づその不思議なるに驚き、而もその現象は、直接に、人間の生活上に關係するを以て、そのおこる所以を考へて、何物か、人間の如き意志を有する、而も人間よりも一層靈妙なるものありて、かゝる現象をあらはすものなるべしと信じ、こゝにそのある物に名づくるに神といへる名を以つてせることは、何れの民族の神話を取つて研究するも、多くは、太陽、月、星、嵐、海などを神とせるものあるにも、明かに認むるを得べし。而して、これらの現象の中にも、人間の生活に有害なるもの、たとへば、日蝕、月蝕、暴風、地震などは、神の怒りに基

宗教の起源

くものなりとし、その怒りを和らげ、幸福を享けためには、種々の手段をつくして、之を祭り、その偉大靈妙なるに驚き、恐れ、崇拜するに至り、こゝに宗教といふものは現はれ出てしなり。之を原始時代の宗教といふ。

更に、太古の人類が不可思議の感をおこせるものは、人間の死ぬといふこと、及び夢の中には、さまざまの現象、醒覺せる時と同じやうなる現象のあらはるゝこととなりしなるべく、これらの現象よりして、人間の肉體の中には、一種靈妙なる靈魂といふものゝ宿るありて、自由に肉體より離れて遊行し、而も肉體とは全く別物にして、肉體は滅して、もとの土となり、水となるも、靈魂はこれと共に滅却するものにあらず。人間の死ぬといふことは、この靈魂が肉體を去るに基くものにて、夢は、一時肉體より離れて靈魂が遊行し、再びもとの肉體に返り來るものなりとせり。これらの考より靈魂不滅——靈魂は決して死するものに非ずして、一旦人間の肉體を離れたるものも、今生にてなし置きたる業の善惡によりて、天堂にのぼり、地獄に入り、あるひは、神と同様にその族の子孫を冥護するものなりと信じ、こゝに祖先の靈を祭り、これを崇拜する風習を生じ、

さきの自然崇拜と共に宗教の發現をたすけしなり。

これらによりて察する時は、宗教といふ者は、神と人間との關係といふことより成り立ちしものといふべく、何故に神といふものが認められしかといへば人間の自個保存といふ性能が、智識の助けを促して、周圍におこるさまざまの現象を解釋して、當時の人間の智識の最高程度において、人間より以上の性能を有するものありとして、こゝに始めて安住することを得たるによりてなるべし。

かくの如くなれば、太古時代は、學問と宗教とは未だ分化せず。自然の現象、人生の事象皆ことごとく神の意志よりおこるところなりと解釋し、従つて之を畏敬し崇拜するが故に宗教なり。之を學問として見る時は、當時にありては、これ以外に説明すること能はざりしが故に、今日の科學が種々なる法則を發見し、之によりて解釋すると同様なりしなり。

かゝる時代には、何事も宗教と關係せざるはなく、疾病も、神の所爲なりと信ずるが故に、醫術も宗教の領分に屬し、人間の運命も神の定むる所なりとするが

故に、道德も宗教と離れず。實に科學と宗教とが最もよく調和せられたる時代は、太古の原始民族において始めて之を見ることを得べし。然るに、世は次第に進み、人智は漸く開くるに従ひて、學術は漸々宗教の領分を離れて獨立し、宗教の領分は次第に狭くなりて、主に人間の生死、苦樂、貧富、貴賤、榮枯、盛衰の如き、寧ろ人生の無常なる方面に屬して、消極的に慰安を求むることのみを支配するに至り、こゝに宗教といふものゝ上に變化を生ずるに至れり。

何れにしても、宗教の起る所以は、タイラーが、自然は生命を有するものとするより起れりとする活物説、スペンサーが祖先の靈は不滅にして、さまざまの作用をなすことを恐怖するより起れりとする祖靈説、マクスミュラーが、智覺理性によるにあらざりして、世界の根底、無限絶對といふものをあきらめんとする性能、いひかふれば、理屈によらずして、感情によりて、この宇宙の真相をあきらかにせんとするより起るものなりとする無限追求説の如きは、何れも一部の説明にして、宗教の眞の起原は、これらの諸説を綜合せるところにありといふべきなり。

七 宗教の本質

何んでもかても、悟り諦めて安住することが宗教なりとは、前に既に説明せるところなるが、しかし、古來、學者、宗教家が宗教の本質に就いて考へしところは、人によりて、その趣を異にせり。ある學者は、人間が智識上より、これこそ完全無缺にして、最高のものなりとせる、ある物に對する智識上よりの愛なり。(スピノーザ)或ひは、人間の智慧の最後の満足なり(フヒテ)とせるあり。人間が、智識と慾望とによりて、最上の理想——これが人間最後の希望なりとするものを定め、之を神として、それが、その人を、實際に動かす程の力あるに至れば、やがて宗教なりとせるあり。(フオイエル)バツハ、ゲイラス等更に又、不完全なる人間は、自己の智慧の力にては、到底測り知ること能はざる、靈妙なる、ある物の實在することを、感情の上より感知し、之に對して信仰するが宗教なり(タイラー)とするあり。或ひは、この宇宙が、人間に對して示現しつゝある不可思議なる一

大勢力に對する信仰が、やがて宗教なり(スベンサー等)とせるもあり。かくの如く、その説く處は様々なれども、吾等人間が現在の境涯に満足すること能はずして、未來にわたりてまでも、如何にもして、永くこの自己を存続せしめ、現在の状態よりも、更に完全にして自由圓滿永久なる境涯に到らんことを望み、その情の切なる、かゝる熱望を以て、現實に存在するもの、如く感じ、之を呼ぶに神を以てし、之に對して信頼し、安住するに至りて、こゝに宗教の成立するものなるを知るべし。而して更に、その熱望するところ、換言すれば、人間の最大理想を、ある現實の人物に結び付けて、その人物は、彼の理想の權化なりとして、之を崇拜し、之に信頼すること、たとへば佛陀の釋迦に於ける、ゴツドの基督に於ける關係の如きは、何れの宗教にも見るところにして、これ即ち宗教の感化をして、一層有効ならしめし所以なり。

宗教を以て、かくの如く解釋するときは、別に、科學哲學と區別して、是非とも宗教を他人視するには及ばざるべし。固より宗教的客體たる神、佛の本體には、様々なるものあり、又、その信仰といふ心の態度にも、人によりて差異はあれど

も、前に述べたる如く、最も廣く且つ最も時代に適切なる解釋を取るときは、宗教も哲學も科學も、皆これ本來一如に婦し、最も有力にして廣く行はるゝものたるを得るに至らん。而してこれ實に予輩素人宗教家たるもの、正に理想とすべき處なり。たゞ怪む。世の宗教家動もすれば、宗教は絶體感情によりて成立するを得となし、そのいはゆる絶體感情なるものは、知識によらずして直ちに絶體を感ずるもの、いはゆる言説を絶したる靈感なりとなす。ブラツト氏亦宗教を以て、意識の中心にあらはるゝに非ずして、縁邊意識なる背景感情グラウンディングによるものなりといへり。ことに知らずや、その絶對感情なるものは、これ只精神の興奮の過度なるものにして、他の場合と別に、性質を異にせるに非ざること。プラト氏の背景感情は、寧ろ之に反して、吾等の精神の底に潜めるものなりとするも、亦これ單に感情といふべきに非ずして、實に、精神全體の作用に出でしところならずや。

八 時代と宗教

宗教の生命は信仰にありて、信仰は精神全體の復雜なる作用に基き、ある中心によりて、安定せる心の態度なりとせば、人智の進み、時代の變化するにつれて、宗教の内容も亦變化すべきは、蓋し當然の事なり。そもく、吾等の精神は、恰も身體と同じく、日々に發達しつゝあるが故に、信仰の内容も、亦之が影響を受けて、常に變化し行くものなれども、信仰てよ態度は、しかく、時々刻々に變化し行くものには非ざるなり、之を身體の状態に比すれば、最もよく明かなるを得べし。即ち人間は、日々營養分を取れども、それがために、直ちに全身の發達を見るものに非ずして、全體の發達は、多少の時日を経て然る後に、始めて現はると同じく、心全體の發達は、また多少の時日の後に現はるゝを常とす。こゝに於いてか、信仰は、比較的恆久なる性質を有するものなることを知るべし。以上は、専ら個人についての考察なるが、更に社會について觀察するも、亦その軌を一にし、その知識、信仰は、時代と共に變化し發達し行くものなることは、今更こゝに之を論述するの要なかるべし。されども、著しき一二の例を援き來れば、上古に於て、ある有形のものが太鼓を打つと解釋せられし雷電は、科學の

進歩によりて、電氣といふものゝ作用なることを明かにし、之を實際に應用して、汽車となり、電車となり、電信となり、電燈となり、その他種々の機械を運轉せしむるに至れるが如き、非常なる進歩に驚かざるを得ざるべし。その初め、神が特に人間の種をこの世に與へたりとせられし説は、生物進化の理法の發見によりて、その面目を一新するに至り、その他、火山、地震の現象、潮汐、日月の蝕の如き、亦皆著しき説明の進歩を見るに至れるは、智識の方面の進歩として、何人も許す所なるべし。之を單に智識として見るも、已に非常なる進歩なるが、これがために宗教上の信仰にも變化を來し、從來の宗教はいたく勢力を失ふに至り、こゝに學術と宗教との衝突を見るに至れるは、果して如何なる故なるか。こゝに至りて、時代と宗教との關係を一瞥するの要あり。蓋し、宗教の社會に必要な所以は、當代の人心を、現實の世界より導きて理想の境涯に向上せしめ、疑惑を排除し、苦悶を去つて慰安の力を得しめ、活動の元氣を養ふがためなり。もし宗教にして、向上、慰安、活動といふことに益なく、却りて文化の進歩を阻害し、活動の元氣を銷沈せしめ、世の人心をして、消極的、神

秘的に傾かしむることあらば、最早宗教はその實質に於いて枯死せるものなり。この根據よりして、現時我邦の宗教を考察するに、最も多くの信徒を有し、最も勢力ありと稱せらるゝ佛教は、果して現代の人心に慰安を與へ、一汎より、非常なる尊敬を受けつゝあるか。予輩門外漢の眼に映ずる所によれば、恐らくは、日に世人の崇敬を失ひつゝあるには非ざるか。これ宗教家たるものゝ、大に研究者慮すべき所なるべし。佛教は、印度に起りし原始時代を距ること已に遠く、その間、支那に於いて、日本に於いて、時代と共に多少變化せる處あるは明かにして、淨土眞宗の如きは、佛教中、最も進歩せるものと稱せらるゝも、而もその大體に於いては、尙依然として、印度的、古代的、一言にして盡せば、抹香臭的なるを免かれざる所あり。従つて現代的には非ざるなり。基督教の如き、比較的、科學の説明に耳を傾くる所あらんとし、現代の社會に適應せる活動的のものありと雖も、その根本的信仰は、尙古代と甚だ異なる所なく、従つて現代の文化と全く調和せりとは云ふべからざるなり。蓋し佛教にしても、基督教にしても、その起りし時代は、現代の狀態とは非常な

る差異あり。加之これら宗教の建設者は、その時代の狀態を視て、その欠點を改進せしめんと、の動機より唱へ出だせるものなれば、時代を去ること遠き現代に於いては、適切ならざるものあるべきは、理の當然なり。故に予輩が彼等に取るべきは、その偉大なる人格なり。その教義には嫌焉たらざるものあり、特に信仰てふものは、心全體が、如何にも然るものなりと得心せざれば、起るものに非ずして、而もその主要なるものは、智識にありとすれば、宇宙の發生、人生の意義、その他日々吾らの周圍に起る現象に就いての解釋にして、已に現代の智識と齟齬する所あり。従つて、これらを統合して立てたる根本的本尊たる神の本體に、疑問を生ずるに至れば、堅固なる信仰は起るべきに非ず。見易き例をひき來れば、佛教の中心は須彌説にはあらず、而もそれが佛説なるか否かによりて、一時信仰に影響せしは何故なるか。宗教は固より哲學に非ず、科學にも非ず。従つて天動説にもあれ、地動説にもあれ、更に關する所なかるべきなり。然も、それらの解釋が、時に宗教に影響を及ぼすは何故なるか。耶穌教は生物學に非ず、又天文學、地理學に非ざれば、人間が如何にして生るゝとも、地

球、天體が如何なりとも、更に關する所あるべきならず。而も創世記の解釋を改むる必要に迫りしは何故なるか。これらの事實を綜合する時は、信仰といふことは、智識が最も主要の部位を占めて、先づ目に見ゆる所の宇宙、自然現象、さては、人間の如何なる縁に由りてこの世に出て、朝夕營々たるべきかなど、あらゆる疑問に解釋を求め、こゝに始めて信仰は成立する者なれば、この信仰を生命とする宗教は、現代智識の進歩せる程度までは、必ず之を嚮導として、彼岸に到達すべき道を進まざれば、如何に法輪を轉ずるとも、何等の効も無かるべし。宗教教義の變更、こゝに於いてか起らざる可からざるなり。

人心には、一面保守的感情ありて、一たび成立せし形體は、之が爲に凝固して、不動不變ならんとし、一面には時々刻々に進化發展して、舊態を破毀せんとするものあり。こゝに於いてか、その初め、人心の需求より、心それ自身が作り出し、社會制度、宗教の如きも、幾多の年月を経過し來れば、時代思潮と衝突するに至る。こゝを以て、常に時勢の傾向を洞察して、舊態を去り新生面を開き、以大勢と調和せしむること、恰も吾人の物質的肉體の組織分子が、時々刻々に、一

面枯死し去ると共に、絶えず新分子を以て補給しつゝある如くならざるべからず。

思ふに、現時代は科學の時代にして、且活動の時代なり。科學はいふまでもなく智識なり。かゝる時代の人心を向上せしめ、慰安を與へ、活動の元氣を養はしめんための宗教は、亦この傾向に適應するものならざる可からず。試みに一例を挙げんか。汽車あり、汽船あり、電燈あり、電信ある今の時代に於いて、破草鞋に腰辨當にて、險惡にして薄暗き山路を辿りて旅行せよと勸め、電信を使はずして、飛脚を出し、電燈を用ひずして、松明を用ひよと云はゞ、人はその迂を笑ふべし。如何に考ふるも、時代と適合せざる宗教は、最早その命脈を保有することは能はざるべし。

然るに、今の宗教界を遠觀すれば、上古時代の民族の信仰に比するも、甚しき進歩を見ず。經典の解釋は、數千年以前のまゝなるが如く、法衣の色は、今も尙古に異ならず。これ、宗教は、その本來の性質として、教權の神聖を貴ぶがために、始終不變ならんことを求め、之を信仰の心理より見るも、智は常に進歩的にし

て意志は始終活動を欲するが故に變化するものなれども、感情は本來變化し易き性質のものながら、また常に意志の變化を調節して、不變的態度を取るが故に、一たび定まれる状態より、容易に變動せしめず。之を保守的性質といふ。故に思想、智識、理性と衝突することあるは、個人の中に於いても、屢起る現象なり。

特に、人間の自己保存といふ本能は、原始時代も現代も一樣にして、智識思想の指導に従はず、何らか一種靈能ある者の存在を信じ、之に向つて加護を求むるに至り、これらのものが、相協合して、遂に、宗教の時代と伴はざる状態を呈するに至れるが如し。

之を要するに、人心は、常に進歩し、時代は常に發展し、現代の人心は現代の進化の程度に一致したる悟り諦め、信仰と安住とを要求するものなれば、この時代要求に適應したる宗教こそ、眞に生命ある宗教にして、予が所謂素人宗教即ちこれなり。この素人宗教は、已成の形式的宗教の、取るべき要素は之を取り入れ、現代の文化と打つて一丸となし、抹香臭からず、アーメン的ならず。佛教

や耶蘇教より見る時は、いふまでもなく、素人的なるには相違なきも、さらばとて、佛も神も無用なり、只理性一片に安んずれば足れりといふが如き乾燥無味なるものに非ず。情もあり涙もあり、冷靜なるに非ずして、温まりある時代的宗教なれば、この世は、神も佛もあつたものに非ず、運は自個が作る所、歩く犬が棒にあたる、働くものが福にあたる、如此のみと悟るを以て、宗教の本領なりとはせず。況して、世の中は、喰うてかせいで寝て起きて、さてその後は死ぬるばかりと諦め、運は天にあり、牡丹餅は棚に在りと悟るも、また未だ首肯し能はざる所なり。

九 宗教界の謎

夢と脾臓とは、自然界に於ける秘密なりとは、嘗てデューマが言ひし所なるが、秘密—不思議は、獨り夢と脾臓のみには非ずして、この宇宙は、實に秘密の寶庫、不思議の世界なり。その間に生存する人間も亦、不思議なる生物なり。太古の民族は、この不思議を以て、直ちに神なりとし、若くは神のなす所と考へたりし

が、爾來幾千年、世は次第に進み、人智は漸く開けたれども、尙未だ全くこの不思議の寶庫は開放せられず、以て近世に及べり。然るに十八世紀の末頃より、十九世紀に入りて、萬有科學大に進歩し、此不思議の寶庫を、造作もなく開放し去らん勢をあらはし、之がために、従來の哲學や宗教の如き、全く思惟啓示のみによりて、この秘密界裡を推測せんとせしものも、大に面目を一新し來りて、萬有科學てふ鍵の所有者と、相提携し行かんとするに至れるは、誠に喜ぶべき現象なり。さり乍ら、宗教てふ者は、この萬有科學と駢馳するを屑しとせざる傾向ありて、動もすれば、古のまゝに神といふものを、十重も二十重も奥深き宮殿の裡に押籠めて、白地に眼もて仰視せしむることを欲せず。眼目沈思して、心の光りによりて、直觀—寧ろ靈感によりて知らしめんとするものゝ如し。こゝに於てか、神といへば不思議の本體にして、宗教といへば、この不思議の力に投託して、安住するものゝ如く思はしむるに至る。宇宙には、果してかくの如き神てふものありや。これ宗教界に於ける謎の第一問にして、最も根本的なものなり。

世の宗教家、動もすれば、輒ちいふ。人間は、不完全にして、到底自己の力のみによりては、宇宙の本體、人生の真相を諦むること能はずして、日々に罪を作り、三界に迷ひ迷ひて流轉しつゝありと。人間、本來果してかくの如く、不完全にして、且つ罪と迷ひとに充たされたるものなるか。これ謎の第二問なり。更に現在の生活に關して、人間の運命てふ者は、常識にて判断し難きところなるより、或ひは不平を抱きて世を罵倒する者あり。或は一生涯を悲觀せるものあり。運命は果して、先天的に定まれるものなるか。はた人間自己が作り出せるところなるか。先づこの理を明らかにせざるべからず。これ謎の第三問なり。

この人間の運命と共に、更に一つの解釋を要するものは、人間死後の靈魂の行方なり。人間は、本來、たゞに現在のみに心をとゞむるのみならずして、未來をも考ふるものなるに、この靈魂の本質は、古來その解釋を與へられざる疑問の一つとして掲げられたるところなれば、これを解決するに非ざれば、充分なる安心は得られざるなり。これ謎の第四問なり。

これらの謎を解決して、時代人心の歸依すべきところを明かにし、安往の道を得て、活動の元氣を鼓舞せんとする、これ實に素人宗教觀の目的なり。而もこの謎を解決するには、如何なる態度を以つてすべきか。換言すれば、この宗教界の秘密の寶庫を開くべき道具と手段とは、何なるか。これ、次に研究すべきところなり。

十 謎の解決の態度

予は、こゝに、宗教上の謎の解決にかゝるに當りて、大に自らを警むると共に、世の哲學者、宗教家たるものの研究の態度につきて、警告を與へんとするものあり。そは、苟も人性に關するものは、人間を中心として、その本質の如何なるものかを明かにせざるべからざることこれなり。由來、歐洲人は人間を主とし、東洋人は天然に眼を向くる者の如し。此を以て、古希臘ホーメルの詩には、自然を寫したるものは、殆んどなく、博物館に陳列せる繪畫について見るも、鳥などを畫けるものは、無く、彫刻と雖も、多くは人物にして、無色にあらず。故に歐

洲の文藝文明は何處までも、人間が主となれることを知るべく、之に反して、東洋は自然界が主となりて、彈琴の音も松風と聞こゆること、想夫戀の

峯の嵐か松風か尋ねる人の琴の音か

駒を早めて行くほどにつま音しるき想夫戀

の如く、その他繪畫、歌謠、亦皆然らざるは無し。故に叙情詩多くして、叙事詩乏しく、物語、小説、淨瑠璃も亦叙情的なり。

試みに、萬葉集の中にて、比喩に多く用ひしものをあぐれば、草には八十六、木に六十六、鳥は三十六、獸は僅に十種に過ぎず。發句には季節が入らざれば、その資格なしとまでいへるは、その由りて來る所を推すに難からず。源氏物語の如きも、常に天地自然と離ること能はずして、人物を寫すにも、必ず自然の景を持ち來りて配合せり。泰西の文學は、今こそ自然を寫すものあれども、古代は生物を主とし、特に獸類の多きを見る。これらは、單に文學技術の上より見たるものなれども、之によりて、東西國民性に、大なる差異あることを認むるを得べし。

更に他の方面より考察する時は、彼は人間を主として自然を觀察し、加之、彼等の棲息する社會の狀態は、生存競争の阿修羅場にして、花鳥風月に放心し、長夜の眠を貪りて、悠悠冥想に耽るをゆるさず。之がために、利用厚生の道開け、大に智識の進歩を來し、此は蓬萊島裡に風月を夢み、或は中華の誇大妄想に沈酔し、徒らに思辨にのみ耽り、花を見ては雲かとあやまたれ、月を見ては、千々に悲しみの涙を湛へ、情をのべ思ひを寄するのみにして、嘗てその花を手折りて辨を數へ、月を捉へて桂の枝を折るとをせず。知的に觀察するものは、その本體を明かにし、之を取つて、利用厚生之料となし、徒らにその幻影に驚かず。情的に歎美する者は、經驗を貴ばず、眞偽を辨ずることをなさず、思辨に傾き、冥想はしり、千百歳をかさぬるとも更に進歩を見ると能はず。この根本的差異は、ひいて現代に及び、學者、宗教家たるもの、研究の態度に、大なる相違を來し、東洋は綜合的にして、西洋は分解的なりとも稱せらるゝに至り、特に宗教家の如きは、動もすれば、神秘に駛せ、科學と並行調和すること能はず。而して常に曰ふ。經驗の上に立ちて、未だ宇宙の奥底を窺ふこと能はざるもの、神佛の絶體

を觀ずる能はざるものは、造詣の深からざるがためなり、修養の足らざるがためなりと。而も、自己は人間の本質を知らず、社會の原理を探らず。徒らに冥想にのみ耽るは何ぞや。宇宙の本體、人間の境涯は果して、如何なるものなるか。神といひ、佛といひ、靈魂といひ、物質といふ。之を認識し、之を思惟するものは何なるか。必竟、人間の心理に基くに非ずや。果して然りとせば、何よりも先に研究すべきは、吾人自身の身體と精神將た宇宙との關係にあらずや。宗教は、信仰を生命とし、信仰は、情のみに基くが故に、只情の安住を得ば、宇宙は如何なるにせよ、人は猿と同類なるにせよ。更に關する所に非ずといはば、それまでなるも、人心は、只情のみのものに非ずして、本來求智的、活動的にして、知らざるものは、飽くまでも知つて後に、安住せんことを要求するものなるが故に、進歩てふことはある理なり。

然るに、進化論を知らずして、人間の自然に於ける位置を定め、心理を研究せずして、人心は罪惡に充たされたりとなし、理科の智識を有せずして、宇宙の本體を説き、社會學を究めずして、人生の意義を解決せんとし、提燈を携へずして關

路をたどり、迷ひに迷ひて、いよ／＼幽冥の境に入り、あな不思議、真相は到底、人間の力の及ぶ所に非ず、神明の絶體不可思議の力に投託するに非ずば、如何てか安住するを得べきとなし、初めは只驚き怪み歎美する一念より、種々の妄想を描き出だし、後には、かゝる妄想を以て、唯一實在となし、其極迷信に陥らざるもの蓋し少なし。

かくの如くにして、豈進歩を見るべけんや。進歩なき宗教は、時代思潮と伴ふ能はずして、人心慰安の力を失ひ、その古き形態は存するも、その内容は枯死するを免かれず。されば、予輩が宗教界の謎を解決して、時代に一致せる素人宗教観を立つるに當りては、飽くまで、人間本位説を以て進まんことは、正當の順路なりと信ずるなり。

本論

人生の大疑問を解かんとせば、先づ自然に於ける
人類の地位と、自然と人間との關係を知るべし。

(キーン)

謎の解決

第一問 神佛の本體

雲表に聳ゆる大厦にも、野末に立てる賤が伏屋にも、家があれば、一人の主人公はあり。この主人公は、一家の柱石、家族の代表者にして、その人物の如何は、直ちにその家族全體の風俗、家庭の良否、さては外部に於ける一般の聲望に關するものなるが、宗教にも亦この一家の主人公と同様に、本尊てよものあり。佛壇の前に金色燦然として、慈悲の心滿面にあふれ、而も威あつて嚴ならず、その風采相貌如何にも圓滿にして、御光さへきらめき、一目見るからに、一種の感にうたるゝを覺ゆ。これ佛教に於ける本尊なり。高く天の彼方において、その力を自然の現象にあらはし、人間の心の中に來往し、十字架上の露と消えしイエスキリストを通じて啓示するものは、耶穌教に於ける本尊なり。かれらは、一宗一派に於ける最高の本尊なれども、更に古來神佛として、體をあらはされたるものには、或ひは、怒髮冠を衝き目眦裂け、火炎の裡に不動の剛勇をあらは

せるものあり。或ひは世界の平和を司る所の優しくして氣品高き女神あり。數へ來ればその幾許なるかを知らず。而してこれら宗教の主人公たる神佛の本體は何れも不思議の裡にかくれて、奇蹟をあらはし、なほ未だ時代人文と一致することをなさざるが如し。

今もし宇宙にはかゝる不思議の神あるかてふ謎を掲げて、之を解決せんには、宇宙は如何にして發生し、如何に變化發達して、今日の如き状態となれるかを明かにし、かくして、後に始めて神の本體を明かにすることを得べし。而して、この研究には二様の道行あれども、人間の智識の發達する順序よりするときは、先づ經驗より入るを正當なりとするが故に、予は先づこの方面より漸次歩を進めて、之が解決を試みんとす。

甲 世界の發生

世界は如何にして發生せしかといふとは、幾千年の昔より、掲げられたる謎の一つにして、之が解釋には、様々なるものあれども、最も古き時代にありては、多

くは神が創造せりとなし、その形態なども亦様々に想像せられたりしなり。これらを原始創造説と呼ぶ。降りて、進化創造説と名づくるもの出て、世界の最初には無限の力と壽命とを有するものありて、之が物質を創造し、之にある勢力を附與せるものが漸次自己の力によりて進化し、今日の如き状態に至れるなり。かくて生物は、第二次の創造の時に、最下等なる單細胞生物が發生し、此が漸次自己の力によりて、現在の如く、進化せるなり。而して、我等人間には、特に靈魂てふものを附與せられ、萬物の靈長として世に出てたりといふ説あり。これより胚胎して、カント、ラブラース、ヘルセル等によりて、唱へ出されし星霧説は、之を彼の創造説に比すれば、大に面目を改めしことは、既に人の知る所にして、この説の出てしは、實に一千七百五十五年より一千八百年代なりしなり。

この説によれば、宇宙の最初には、非常なる熱を有する一大瓦斯塊ありて、絶えず廻轉しつゝあり、それが次第に凝集すると共に、小さき塊に分裂して、砂を散らずが如く四方に飛散しながら、なほ絶えず廻轉し、その中の各分子の引力に

よりて、積圓體の塊となり、速力漸く加はりて、外方にある所は分離して、次第に數多の輪を生じ、その輪はまた凝集して多くの遊星、衛星を生じ、中央部にあるものも、その他のものも、その容積の大小に應じて冷却、收縮し、かくして、現在の状態となれるものならんといふ。さてこの説に就いて、誰も問はんとする所は、その廻轉する原因は、何なるかの點なるべし。カントは之に答ふるに、外部が凝集するに際し、分子の濃厚なる部分に、他の分子が吸収せらるゝためなりとし、ラプラスは、各部分が精密に平均せざりしより、收縮する際、自己重力の作用によりて、自ら廻轉を始めたるならんとせり。かくして、ダーウインの生物進化論を始めとし、萬有科學の一大進歩を來したる結果として、この星霧説を變改せざるべからざるに至り、こゝに最も進歩せる學説を見るに至れり。最近宇宙進化説と呼ぶものこれなり。この説にいふ所の大要を示せば、宇宙の太初には、物質が如何なる形にて存在せしかは、今日より推測し難しと雖も、星霧説にいふ如き瓦斯の状態になるまでには、必ずや、ある物質と物質とが衝突せざるべからず。如何となれば、今日の理學上の實驗よりするに、物質

が瓦斯の形となるには、非常なる熱を加へざるべからざるに、その熱は、物と物との衝突に基くと推測する外なければなり。而して、かく高熱を有する瓦斯塊は、次第に再び熱を空間に輻射し、半瓦斯状より半液體となりし時に、潮流的作用が起り、その結果として、分離して、各個星を生じ、その星は、皆一定の行路を取りて廻轉しつゝあるに、もし、他の星と衝突する時は、直ちに變化を生じ、かくして、安全の行路を取るものゝみ、殘存して、現存の如き天體をなせりとなす。潮流的作用とは、もと月の潮汐を起す現象より、數學的に研究せられたるものにして、ジョージ・ダーキン氏によりて、説明せられたる所なり、この説に従へば、二つの太陽が、一直線に進行する時に、相接近することあれば、各固有の引力を働きかけ、之が爲に、速力一層強大となり、且つ引力のために曲線路を取り、更にその形狀に變化を生ずること、月と地球との關係より、潮汐といふ現象の生ずるに均しく、かくて自轉しつゝある間に、二個に分離して、所謂双子星となり、かくの如くにして、多くの天體は發生したるなり。さて我が太陽が、星霧の形をなしたる時代には、各分子間の空隙は頗る大にし

て、その温度は今の太陽系全體よりも遙に高かりしなるべく、而して其中の瓦斯の各分子は、一定の温度を得て、又一定の位置を取り、ある方向に運動すべく、その方向は、各分子の異なるが爲に相衝突し、之が爲に「エネルギー」は熱と變じ、その結果、次第に圓盤形となり、かくて星霧は大に輻射して收縮凝集し、之に伴ひて密度及び廻轉速力いよゝゝ増加し、而もその中心の速力が最大なるために、自ら中心に引き込まれて螺旋形をなし、この螺旋の中心が、一大凝集の中心となり、その他にも、數多の中心を生じ、各同一の速力にて、全體と共に廻轉する間に、公轉、自轉をなすに至れるならんといふ。これ最近の宇宙發生説の大概なり。

なほこゝに更に記述すべき要あるものは、宇宙は死して復た生ずといふこととなり。そは天體は日々に冷却しつゝありて、我が太陽の如きも、今はその熱度の最高點より既に降りつゝあり。現下收縮の度は、一晝夜に凡そ七寸五分にして、收縮のために生ずる熱量と、輻射のために失ふ量とは略平均の度を保ち居るも、終には冷却するに至るべく、現に我が月界の如きは、全く熱

を失ひ、地球も亦内部に熱を有するのみなり。かくの如く諸天體が冷却し了れば、終には死世界となるべく考へられんも、一たび衝突を生ずればまた熱を生じ、非常に膨脹して再び若がへり、更に冷却し循環して、死すること無きてふことなり。之を下等生物の生殖力が衰へて死滅に近づきしものも、二個の體を同所に置けば、「コンユガチオン」を起して、再び若がへる現象に比することを得べし。

附説 天體の發生期に就いては、獨逸の星學者「チェルネル」は、之を五期に分てり。

第一期 霞雲星時期 發光瓦斯の状態を呈する時期。

第二期 發光液體時期 間斷なく光を放つ恒星はこの時期に屬す。

第三期 表面冷却して殼を生じ、無光と變ずる時期にして、太陽の表面に、時に斑點を認むるは、これ殼の生ずる前兆にして、正に第二期より第三期に移らんとする期にあり。

第四期 表面は全く殼を生じ、無光となる時期にして、内部の高熱ある部

本論 謎の解決

吾

は時々皮殻に激して破裂を起し、之がために光を發す。赤色にて輝く星は第三期に屬するものにして、この星が俄かに滅することあるは、第四期に移り行くがためなり。

第五期 皮殻益々厚くなり、水蒸氣は凝結して水となれる時期にして、我地球は、今や第五期にあり。

地質學上より地球の時代を分つは、海陸の状態、氣候、生物等に變化ありしために、地層に差異あるによるものにして、もし地層の不整合の状態よりする時は、

- 一 太古代 (更に二期に分つ)
- 二 古生代 (更に六期に分つ)
- 三 中世代 (更に三期に分つ)
- 四 新生代 (更に第三紀層、洪積層、沖積層に分つ)
- 四 大期とすべく、生物界の變化のさまより分つ時は、次の七大時期となす。これは各地層より發見せられたる化石によりて立てしところなり。

- 一 原始時代
 - 二 無脊椎動物時代
 - 三 魚類時代
 - 四 兩棲類時代
 - 五 爬虫類時代
 - 六 哺乳類時代
 - 七 人類時代
- 古生代(志留、利亞層時代)
 - 全 (泥盆層時代)
 - 全 (石炭層時代)
 - 中生代
 - 新生代
 - 新生代の洪積層時代

地球の地殻が構成せられてより以後の年代については、或ひは七千萬年ならんといひ、又九千五百万年なりとし、最も長きは六十億年といへるあり。これらの説は、各據るところありて算出せるものなりと雖も、未だ精確なる説あるを見ず。

これらの説は、固より一の假説に過ぎざれども、其の基く所は、皆經驗上の事實より出發せる學術上の原理を綜合して説明を下せるものなれば、吾人現在の知識にては、これに満足し、更に科學の進歩によりて、一層闡明せらるゝ時期あり。

るべきを信ずるなり。
 なほこれにつぎて起るべきは、吾等人類を始めとし、あらゆる生物は、如何にして發生せしかといふ疑問なり。

乙 生物の發生

不思議なるは生物の發生なり。宇宙の最初には、或物質が存在せりとするも、その物質は、やがて高熱を有する瓦斯體となれりとせば、生物は、當時未だ存在せざりしなるべく、然らば、何物より、何れの時代に變化し來れるか。試みに古來世に傳はれる所の説を掲げんに、
 一 神が創造せりとする創世記の説は、これ古代人智蒙昧なりし時代の想像にして、今日にては固より承認せらるべくもあらず、キユビエー氏は、この説を科學的に説明せんとして、カクストロフイー説を立てたれども、なほ一汎に認めらるゝに至らず。

二 自然に生出せりとする説には、腐敗せる有機物より、比較的高等なる他の生

活體即ち蠕虫、魚類の如き生物の發生せりとするあり。されども、これは顯微鏡の發明ありしより、バストーイル、チンダル氏等の研究によりて、微菌の如きも自然に生出するものに非ざることを明かにするに至れり。更に最初の生物は無機物より生じ、而もその最初の生物とは、最も簡單なる蛋白質類の一種にして、無機物を自己の體内に取りて、之を同化し、分裂して生殖し得る者ならざるべからずとせるフルユイゲル氏の如きあり。同じく自然發生説なれども、ブライエル氏は、生活體より發生せざるべからずとせるが、この説に従へば、今日現存する生活體の祖先は、天體の發生せしと共に存せざるべからずして、現時見る如き天體は、最初は、一の大なる烈火の如き生活體なりしが、漸次冷却し、重金屬は、先づ凝固して、無機物となり、液狀となりて留まるものは、遂に化學的作用によりて抱合して、溫度下降して今日の如き原質形に變じたるものなりといふ。

三更に天來説とも名づくべき一説によれば、地球上の生物は、天降石の媒介によりて、他の天體より、我が地球に落ち來りしものなりといふ。そのいふ處に

よれば、天降石には、有機質を含むによれば、従つて生活體をも包含せしと見るべく、それが熱せられて、我が地上に落ち來る間は、生活體は、一時假死の状態にありしものが、再び蘇生せるならんといふ。されども、この説に従へば、我が地上に落ち來るまでに他の天體に生存せし生活體は、如何にして發生せしかといふ疑問は、未だ解決せられざるなり。

之を要するに、我が地球上に生物の發生せしは、如何なる事情に基くにせよ、生物の生存に必要な雨水の生じたる後ならざるべからず。且つ、最初に發生せし生活體は、その源泉は、一にして、而も最も簡單なる生活物質の一塊なりしものが、漸次に進化して、今日の如き多數の生物となれりてふことは、進化論の教ふるところなり。その最原始生物については、ネグリー氏は「プロビオン」と名づくる想像的のものなりしならんとし、ヘッケル氏は「モノラ」なりとせしも、前者は、單に想像たるに止まりて、未だその實際に存在することを發見せられず。後者は、已に原形質と核質とを有するものにして、單細胞生活體に非ざるを知るに至れり。されども、最原始生活體は「プロビオン」の如きものにして、之

が漸次進化して「モノラ」の如き状態となりしものならんとは、種々の方面より推論し得べきところなり。

ネグリー氏嘗て論じて曰く、生物の發生てふことは、これ物質及び力の不滅則より生ずるところの結果にして、經驗及び實驗の問題に非ず。必よそ物質界は、皆因果の關係より成り立てるものにして、宇宙間のあらゆる現象は、この法則に従ふものなれば、有機物とて、もと無機物の結合より發生したるものなりといはざるべからず、といへり。然らば、生物を組成せるところの細胞を精査せば、この裡には、無機物より有機物に變化せしめし神の美妙なる藝術を發見することを得べきにはあらざるか。

丙 生命の根原

生物の身體を構成せる細胞は、原形質と名づくるものより成り、この原形質は、主に、炭素、水素、窒素、酸素の四元素より成れる、いはゆる炭素化合物の一種にして、生命のある所には必ず存するものなるが故に、ハックスレー氏は之を生命

の本源なりといへり。この中には核を有し、核は球形にして、薄き膜を具へ、内に核液あり。その液には染色物と非染色物とありて、染色物は「ヌクレイン」、バラヌクレイン」の二物質よりなる。而して、原形質は、同化と増殖との作用を有し、核は遺傳質を傳へ、細胞質は、外界に應化する作用を營むが故に成長し、その體の大きさ、一定の度に達すれば、分割してその數を増す。その分割には、直接と間接とありて、生物はこれによりて子孫を繼續することを得るなり。

されば、原形質と核とは細胞の緊要なる成分にして、二者その一を欠くときは、細胞は、生活を持続すること能はず。而して同種の細胞集まりて、組織をなし、組織は更に集まりて、器關となり、器關集りて、「ベルゾン」をつくり、「ベルゾン」相集合して、こゝに生體てふ社會をつくり以て生活を營むなり。

さてこの生活物質が生活を營むは、そも何によりてなるか。いひかふれば、生活現象の原因は何なるか。これ細胞の精査について起るべき疑問、しかも最も重大なる疑問なるべし。

古代にありては、生物の生活するは、生活力と稱する、物理や化學的以外の一種

不可思議なる力の存するがためなりとし、或ひは、また有機體には精神作用なるものあり。これも、と生活力より來れる者にして、こゝが、無機體と異なるところなりとせしが、よく詮索し來れば、生活體の成分と非生活體の成分とは、常に新しき原子と結合して、舊き原子を分離し、いはゆる新陳代謝をなす(生活體)と、否らざる(非生活體)との區別あるのみにして、その結合し、分離するは、物質と併存する「エネルギー」の作用にして、エネルギーと云ふものは、物質の存するところには必ず存するものなれば、非生活體にもこれあるべく、而して、生活體に至りて、特に結合、分離をなすは、これその力の發達進化せるに基づくものにして、始めより一種不可思議なる生活力のあるには非ざることを推すことを得べし。

然らば、この物質は、如何なるものより成れるかといふに、こは、分子より成り、而もその分子は、化學的方法によりては、遂に分つこと能はざる原子といふものより成れるものにして、その原子は、更に微細なる電子と稱するものより成り、その直徑は、水素原子の約千分の一に相當し、一定の陰性電氣を帯びて、陽性電

子の内に在り、而も絶えず循環運動をなすつゝありとは、トムソン氏の電子説にいふところ、これを最近の物質観となす。こゝに於てか、生活といふもの、最根原は、物質を構成するところの最單位なる電子固有の性に基くものなることを知るに足るべし。

予輩は、生物發生の起原をたどらんとして、電子説にまで進むことを得たり。これより更に進んで、その根原を探り出さんことは、固より容易の業に非ず。

エミール、デュボア、レイモンも、宇宙の七不思議の中に、生命の起原を數へて、難解の一つに加へ、ツォーレーヌが、無機物より有機物の生じ來りしことは、自然淘汰の進化説にては説明すること能はずといひしも無理ならぬことなり。さり乍ら、最進宇宙進化説のいふ所を以て、假りに事實に近しとすれば、生物とても、必ず、その最初は、瓦斯状なりし物質より分れ來りしものとせざるべからず。果して然りしならんには、その物質と、エネルギーとが進化して、生物の發生となりしことを承認するより外に、説明の道なかるべし。予輩は、少くとも、學問といふ方面よりは、この説明に満足する外なきを信ずるなり。

丁 生物の進化

生物の發生の根原をたどらんとして、細胞の原形質をさぐり出し、更に之を精査して、電子といふものに分析することを得て、その電子には循環運動の性を固有するが故に、生物の生活する根原は、要するに、この固有性に基くものなるべきことを知り得たり。こゝに於て、問題は、更に一步を進めて、最初單一なる生物より、如何にして、現在の如き無數の生物の種屬があらはれしかを明かにせんことを要求するに至れり。この疑問を解決せんとせるものは、實に生物進化説なり。この説は、ダーウインの始めて唱へ出せるところにして、その基礎とするところは、

一 生物は、すべて、非常なる、繁殖性を有す。

二 その結果として、生存競争が起り、最も適したる者は生存し、否らざるものは亡ぶ。之を自然淘汰といふ。

三 生物は何れも、遺傳性を有すると共に、變化性を有す。それがために、その

生るゝ子孫は、略同一なれども、その間に亦變化を生じ、その結果、遂に種々の變種を生ずるに至る。この性質を應用して、生物の形體及び機能を、人為的に變化せしむることを得。これを人為淘汰といふ。

四世界も亦常に變化しつゝあるが爲めに、生物の棲息する外界の事情に、種の變化を來し、その結果、同一種の生物にても、變化を見るに至る。

これら四個の條件にあり。

試みに、最初若干の同一なる生物が存し、それが蕃殖して、數多の新生物を生ぜりとせよ。同一の母體より發生せるものなれども、悉く一樣なる能はずして、發育の速きもあるべく、遅きもあるべく、かくて、それらが各、更に新生物を蕃殖するに従ひ、數は次第に多くなるによりて、その間に、生存競争行はるべく、その中にて、競争に勝ち得たるものは、ますます發達し、否らざるものは、或ひは、亡び、或ひは、始終同一の形狀と位置とに停止すべく、また、かく蕃殖盛んなれば同一の場所にのみ生活すること能はずして、氣候、風土その他外界の事情の異なるところに分散すべく、これがために、形體にも様々の變化を來し、かくの如く

にして、生物の種屬は數多に分れしなり。之を人間が徒歩競争をなす状態にたとへんが。十數人が同時に同一の場所より出發するにもかゝはらず。或者は、真先に先著點に驅けつけ、ある者は、之より少しく後れ、ある者は、中途にたふれ、又或者は、最も後れて、恰も適當なる距離に配置せられたるが如き状態を見ると同一なり。

翻つて試みに、受精したる一個の卵を採りて、これが分裂して成長する狀を視るに、質液てふものを取りて發育して、胚胞となり、人卵は一週目にして、この状態となる。その一部内方に陥入して、内外胚葉となり、胞門と原腸とを生ず。かくて、内外細胞間に分業を始め、外層は、外界を、内層は、食物消化を司るに至る。

異細胞動物は、何れも卵の時代、桑椹狀の時代、原腸の時代を経過せざるはなく、又、この三期は、異細胞動物の個體發生中にのみあるにあらずして、現存せる動物の中には、この三期以上には發育せざるものあり。卵期にて發育の止まれるものは、アミイバにして、桑椹期に止まるものは、バンドリナ。原腸期に止まるものは、ハイドラ、虫あり。これより更に生長して、前後、左右、背腹の部面を生

じ、脊索を造り、水中を游泳する物あり。鰓孔消失して肺を生じ、大氣を呼吸し、尾を失へる蛙の如きあり。漸次變化して、或ひは鳥類となり、哺乳類となり、その状恰も一箇の幹莖より枝を生じ、各枝更に小枝を生ずるが如く、かくの如くにして、遂に生物の一大系統をつくりしなり。而して、進化とは、實にこの過程に名づけしところなり。

これによりて之を視れば、進化の原因については、なほ、(一)新ラマルク説、(二)ハックスレー、ヘッケル、スペンサーの説、(三)ワイスマン等の異説あれども、

生物の起原は一にして、種族の漸次變化し、一種より數種に分れ、而も各種の間に血縁ありて、進化は競争に原因するものなり。

といふ事は、今日にては、最早疑ひを存せざるところなり。されば、各種屬の相異なる卵を取つて、神が授けしに非ざるを知るべし。

述べて、こゝに至れば、忽ち一個の疑問に接著すべし。曰く生物の中にも、植物は如何にして、動物と分岐せしかの疑問これなり。この疑問に就ては、現代の學問は、次の如く答ふるに躊躇せざるなり。

野中に立ちて人待顔なる女郎花、園裡に匂へる薔薇の紅顔、何れも、我が思ふ人のそれに似たるを歌ふは、常に詩人の戯れのみならず。彼等は、慥かに精神を有せり。「オジギサウ」の葉片が觸接によりて突然閉合し、「マヒハギ」の葉片は、上下回轉運動をなす。これ即ち彼等が外界に對する感覺に非ずや。更に、彼等植物の生活状態、組織を檢するに、下等植物及び植物の精蟲の如きは、自由に水中を游泳すること、下等動物のそれに異ならず。而して、下等動物にも亦、水中の岩石に著きて運動せず、一見植物の如きものあり。更に食物の性質と、之を攝取する方法とに於けるも、動物は有機物を取り、植物は無機物を取るとのみいふ可らずして、寄生植物菌類の如きは有機物を取り、又普通一般の綠色植物にても、多少有機物を取ること、近時の研究によりて知られたる所、特に肉食植物は、蟲類及び他の小動物又は蛋白質肉纖維等をも消化し、その吸収、消化の方法なども、動物と甚だしき差異あるにあらずして、只程度の差に歸すべきのみ。

尙植物を組織せる細胞を檢すれば、晩近の研究は、セルロース質は植物の特有

にして、キチン質は動物細胞膜の特有に限るべきにあらずして、何れも二者に通じて存し、之を以て、動植物差別の標的とするに足らざるを明かにしたり。加之、植物の細胞が、分裂して生長する状態、及び生殖作用によりて、子孫を蕃殖せしむるありさまを比較し來れば、一として、動物と類似せざるは無くして、遂に、二千二百年以前に於いて、アリストテリスが、動物も植物も、只生物となし、以て無生物との別を立てしことの、正當なるを知らしむ。されば、動植物は、根本的に差異あるものにあらずして、たゞ、進化の程度の差異あるがためなることを知るべし。

自然に於ける人類の位置

生物の種屬發生が、全く一原より來れりとせば、何故に、現在に於ても、かゝる事實が現はれざるか、てふ疑問は、必ず起るべきところなるが、之に答ふるには、先づ發生學上より、個體の發生するありさまを明かにし、この個體發生と、生物の系統的發生とは、その軌を一にするものなることを前提として、現代の生物は、

刻一刻進化しつゝありて、遠き未來に於て現出せらるべき途端にあるものなり。その結果は、眼前に之を見ること能はざるも、必ずや、現在のものよりは異なるものゝ現はるべきを推斷するを得べし。現に、園藝家は、人為陶汰の法によりて、種々なる異種の植物を作りつゝあるにあらずや。即ち米國人ルソールソー、ポンバンクが、刺なき而も肉の食料に恰當なる「ジャポタン」を作り出せるが如きこれなり。動物に於ける金魚の如き、長尾鶏の如き、亦皆、變種の多きは、人の知る所、人類の如きも、將來文化の影響、其他外界の影響等によりて、著しき變態を見ることあるべく、他の類人猿の如きも、之を養育して、幾多歲月の功を積まば、現代人類の有する形態、智識の程度に進化せしむること、蓋し難きに非るべし。

之を要するに、宇宙間の物質は、其初め單純なる一原より、幾多の歲月を経るに従つて、漸次種々の状態に分れ、或るものは金石土壤となり、あるものは、それより更に生物の根原となり、生物は更に分れて草木となり、鳥獸魚介となり、その進化の極度に達せしものが、遂に人類となりしにて、最初より、かゝる差異のあ

本 論 謎の解決

りしものには非ざるを知る。こゝに於てか、人類の自然に於ける位置は定められり。即ち人類は他の生物と、全然最初より異なる種属のありしにはあらずして、他の生物より進化して現在の状態をあらはせるなり。故にその系統よりいふ時は、犬も、猿も、牛も、馬も、或ひは空に翔る鳥、水に游げる魚も、皆悉く親戚にあらざるはなく、この方面のみより見る時は、人類なりとて、生物界を濶歩して、他の生物を、眼下に睥睨するを容さず。

されども、その進化發展の一面より見る時は、その身體機關の精緻なる、腦髓組織發展の迅速なる、他の動物に對して、最上の位置を占め、彼等を願使し、彼等を服従せしむるに足るものあり。こゝに於てか、人は萬物の靈長なりとの自信は、依然として損せらるゝことなし。たゞ、その靈長なりてふ意義は、從來の超絶的なるに反して、俱在的と變ぜしことは、深く注意を要する所なり。換言すれば、神が、特に人類の種属を、授け給ひしが爲に、靈長たるには非ずして、生物の一大系統上、現世界に於ける進化の最頂點として、人類が現はれしことこれなり。

二 總 括

かくの如く、經驗科學の道筋を辿りて詮索し來れば、宇宙には、不可思議なる神の存在を認むること能はず。少くとも、古代の民が信じたりし如き靈妙なる神の實在は、何處にも見出す事能はず。こゝに於てか、宗教界に於ける謎の第一問は、之を解決することを得たるべし。されども、その根本に至りては、尙疑問に屬するものあるを忘るべからず。さらばとて、直ちに人間の知識には限界ありて、到底宇宙の真相をさぐることは能はずとして、情の方面よりたどりて、始めて、眞實の宇宙を觀ずることを得べしとなし、全く宇宙を離れ、人間を離れて、全智全能なる神の意志に出づるものなりとすべからず。宜しく、更に人間の本質を明かにし、然る後に、吾人の心と神とは如何なる關係あるかを見ざるべからず。

第二問 人間の本质

乳房をよくめる緑兒、髪を垂れたる幼兒は、恐ろしきものを見れば、忽ち走りて父母の膝下にかくれ、疑はしきものを見ては、忽ち之を父母に質し、欲するところあれば父にねだり母に求め、一にも二にも父と母とを頼みとなす。これ實に人間自然の情に基くところにして、彼等が、かくも父母を力とする所以のものは、自己の力未だ以て獨立するに足らず。而して父母は全智全能にして、慈愛の情あり。之にたよれば、何事も足らざる所なく、憂ふる所なきを以てなり。されども、こは、子女の極めて幼少なる時代に限れるものにして、漸く成長し獨立するに至れば、人間自己が最後の頼みとすべきものは、父母にもあらず、社會の長者にも非ず、況して學校時代の教師にもあらずして、終に自己の心の中に「あるものを見出すに至るべし。宗教に於ける客體としての神佛の本尊も亦略これに似たるところあり。太古民族の未だ蒙昧なりし時代には、恰も子女たる者が、その父母を力とするが如く、神佛——人格的——人間の如き意志を有するもの、存在を信じて、一にも二にも之にたよりにて、始めて安全を得べしと考へたりしも、人間知識の進歩するにつれて、次第にその神佛の本體に變化を來

し、現代にては、神佛の本體を以て、人間の信仰てふ内心の投影なりとせらるゝに至れり。されば、宗教界に於ける第二の謎を解決せんためには、是非とも、人間の本質、特に人間の精神の内容を明かにし、人間の心は、果して、迷と罪とに充たされて、人間自己の力のみにては、悟り諦むることの出來ざるものなるか。神や佛の力に投託せずしては、世渡りをするとは、叶はざるかを明らかにせざるべからず。

甲 人間の身體

世に哲學者なる者あり。人間を以て小宇宙となす、蓋し大宇宙の縮景となせるなり。世に宗教家なるものあり。又人間を以て時に小我となす。蓋し宇宙の大我に對せしむるなり。蓋し吾等人間は、物質的的身體とともに、精神を有したるに、因果の機械的法則に支配せらるゝのみに非ずして、自らよく自然を制服して、自己の生活に利用することをなす。もし、自然の現象を以て、宇宙の一大勢力、將た一大精神の發するところなりとせば、人間は、實に區々たる體と

方寸の心とを以て、この大勢力の精神を制服せるものといふことを得ざるにはあらざるべし。かゝる能力を有する人間の本質こそ實に人間の宜しく詮索すべきところには非ざるか。とかく、人間は外部の事物にのみ目をつけ易くして、自己の内部を顧みることが却りて忽ち諸に傾きあれば、外は神の本體を明かにすると共に、内は人間の本質を考察せざるべからず。これことに、人間の本質を標題を掲げたる所以なり。

抑々、人類がこの地球上にあらはれ出でしは、舊世界の地層の新世界の沖積層と接する所、即ち第三紀層の末よりならんとは、近時漸く勢力を得來りし説なるも、尙疑問に屬するを以て、新世界に至りて始めてあらはれしとする説を以て、正確なりとし、さて、如何にして之を知るかといへば、今日までに發見せられし化石によりて知ることを得るなり。試みに、之を示せば、生物の發生は、大凡次の如くなりしならんといふ。

本論 謎の解決

き

第一表

生物名	時代	
	沖積	洪積
人類	○	
哺乳類	○	
鳥類	○	
兩棲類	○	
魚類	○	
節足類	○	
軟體類	○	
原腔類	○	
皮膚類	○	
管束花	○	
藻類	○	
松柏類	○	
蘇鐵類	○	
棕櫚類	○	
被子類	○	
雙子葉類	○	

本論 謎の解決

第二表

生物名	時代		
	新	中	古
封樹木	○		
四射珊瑚	○		
丕尼光	○		
蘇鐵	○		
海膽	○		
腕足類	○		
藻類	○		
雙子葉類	○		
箭石類	○		
六射珊瑚	○		
哺乳類	○		

き

而してその原始人類の化石は、西紀千八百五十六年、始めて、ネアンダータールに於て發見せられ、當時は種々の議論ありしが、近時に至り、シュワルベの研究によりて、いよ／＼原始人類の化石なることを明かにするを得たり。即ち現代の人類の形状と、この化石の形状とを比較するに、その頭蓋の形状は極めて高等の猿に類似し、而も類人猿とは異にして、猿の樹上生活より一步進みて、直立の姿勢となりしもの即ち人類の階級に進みしものなること疑ふべくもあらざるに至れり。

蓋し、人間と類人猿とは、最も近接のものたることは、胎生學上、比較解剖學上、はた生理學上より證明せらるゝところなるも、類人猿は、なほ樹上生活なるがために、上肢の發育殆んど極端に達し、下肢の長さを一〇〇とすれば、上肢の方却りて長く、一〇〇以上最も長きは一四〇にして、之を現代の人類の、下肢の一〇〇に對する上肢の七〇なるに比すれば、甚だしき差異あり。

腦髓の發育も、之を直立姿勢のものに比すれば、未だ偉大ならざるところありて、この類人猿より、直ちに現在の人間の形態に進化せりとは思はれざりしな

り。然るに、この疑問を解決して、その間の連絡をつけしものは、實に、この化石にして、猿が人間に進化せることを證明するを得しめしなり。

以上は、人類が地球上に發生せる時代と、人類最初の形態とに關する概要なるが、更に、各個人が、最初母の胎内に宿りしより、漸次發育して、遂に、母體を辭して、この世の光明を浴ぶるに至るまでの状態を察する時は、受精したる卵が質液を養分として、一週日の後胚胞となり、やがて内、中、外の胚葉を生じ、こゝに分化の三大基礎をつくり、各種の器官を生じ、遂に個體として、生れ出づるなり。若更に腦髓の發育について胎生學上よりする時は、母の體内に宿りて四週日の頃に至れば、前腦の部位に縦に走れる溝を生ず。これ大腦の各半球の基礎を造るものにして、前腦の下面の兩側に、各、肥厚の部分を生ず。これ後に腦幹神經節となるべきものなり。要するに、腦胞は一の袋狀のものにして、側背、腹壁あり。その各壁の發育の程度に種々の差異あるために、複雑なる形状を生ずるものにして、五週日前後には、大腦の發育は、他の部分よりも極めて迅速にして、八週日に至れば、更に大に進んで三ヶ月乃至五ヶ月の頃には、全腦髓中の最

も大なる部分となり、その後ろに、稍小さき小脳を具へ、視神経葉の發生を見るに至り、六七ヶ月に至れば、大脳の皮質部は褶を生じ、八ヶ月には殆んど猿類の脳と同一の程度に發達し、かくて、到底他の動物に見ること能はざる精妙の形状と性能とを有するに至る。この脳髓の發達の速度こそ、實に人と猿との岐るゝ所以なるなれ。

附説 男女兩性は、如何なる妙機によりて定まるものなるかといふ疑問は、從來醫學者の屢、解決を試みしところなるが、今日にても、未だ一定の説あるを聞かず。たゞ、此には、二三の説を掲げて、参考に供すべし。

奥國のシエンク氏は、兩性の分かるゝは、父母の強壯程度に比例し、受胎の當時、父強壯なれば、その子は男、母強壯なれば、女性なりといへり。

獨逸のドッペルト氏は、父母の營養状態に關係するものなりとせるが、この説は、要するに、シエンク氏の説と一に歸すといふべし。

キツシユ氏は、受胎の際、兩者交互の機能によりて定まるものにして、父母の年齢の差異、性慾の強度、卵の脱離後、受胎する時期に關することを主張せり。

ハウシユエルン氏は、活氣ある婦人は、通例男兒を産み、否らざるものは、女兒を産むといへり。

フアンリント氏は、兩親の中の弱きものゝ方に向くものにて、母強ければ、生兒は女、父強ければ、生兒は男なりとせり。

もしそれ、身體各部の構造と、その機關の性能とに至りては、營養、蕃殖、運動、感覺の各器關は、皆それ〴〵に分業的にはたらしめて、全身の生活を營みつゝあり。營養機關としては、消化器、呼吸器、血管系、排泄器關ありて、營養分を外部に採りて之を消化し同化し、新陳代謝によりて、不用の物をば體外に排泄し去り、蕃殖器關には、生殖器關あり。運動器關には、筋及び骨格あり。感覺器關としては、皮膚、五感器、神経系あり。而も、各器關のはたらきは、一大中樞たる大脳部に於いて統括せられ、一部の障害は、忽ち全體に影響を及ぼし、かくして、生活を完全ならしめんことをつとめたり。そのありさまは、恰も文明國に於ける國家の行政器關に異ならず。

試みに、國家行政の器關を視よ。もし國家の治安を亂すものある時は、小なる

ものは、警官之を捕へ、大なるものに至りては、時に兵力を用ひて鎮壓し、判官その罪を判じ、かくして後、之を獄裡に投じて危害を防ぐ。もし人間身體の一部に障害の起らんとすることあれば、警官たる神経は之を大脳の中央政府に急報し、大脳はその報導を受けて、その局部に命じて疼痛を與へて之を撲滅せんことをはかり、一面、他の器關に報じて之を警戒せしめ、かくの如くにして、全身協力して障害を除き、大事に至らざらしめんことをはかる。その趣、敢て、國家の行政に異ならず。況んや、その器關の精緻性能の功妙に至りては、實に驚くべきものあり。

乙 人間の精神(二)

人間の人間たる所以は、身體の構造機能が、他の生物よりも、最上位にあるがためのみなりと思ふは、間違なり。身體の構造は、生活の状態に適應して變化せるものにして、その生活＝身體保存のためのみの生活には、甚しき優劣のあるべきものにあらず。その生活の價值を定むるものは、實は、生活に伴ふ精神作

用にあるなり。詳しくいへば、この世に生れ出てし所以を知り、如何に生活すべきかを考へ、たゞ、機械的に飲み且つ食ひ、起臥するにあらずして、理想を立てて、自己の本性を發揮し、發展し、過去を思ひ、未來を考へ、生活に何等かの意義あらしむるにあり。而して、かゝる精神作用あるものは、實に人間の外には、なきなり。こゝが人間の人間たる所以にして、神も宇宙も皆悉く藏めてこの精神といへる一大寶庫の内にあるなり。

そも、精神の活動する寶庫は、脳髓にして、大脳は、實にその中央府なり。その構造の複雑にして、精妙なることは、暫く之を説明することを止めて、その精神の作用について考察すべし。

さて人間の精神は、身體が、最初卵より次第に發育すると同様に、精神萌芽ともいふべき状態より、身體内部の活動と、外部の刺激とによりて、漸次に發達するものにして、身體に幼年期、成人期、老人期あるとひとしく、精神にも亦この階段あり。而して、その發達する次第を考ふるに、恰も植物の種子が養分を吸収して發育し、一個の獨立せる植物となり、再び種子を結び、その種子は、地に落ちて

本論 謎の解決

發芽し、更にまた一個の植物となるが如く、精神も亦常に活動しては、經驗てふ養分を收受して之を消化し同化し、以て一段の發達を來し、更に之を基礎として活動し、かくの如くにして、遂に止むとき無し。

而して、この精神が現在活動しつゝあるすべての領域をば意識と名づけ、常に流轉して、しばらくも止むことなし。このありさまを意識の流れと呼ぶ、而もこの流れは、勝手次第に何の秩序もなく、行はるゝものに非ずして、必ずこれが中心ありてその流れを統括す。その中心たるものを名づけて自我といひ、その精神全體を統括するさまより之を統覺と名づく。吾人の精神活動は、皆この自我てふ中心の支配を受けざることなし。但し、精神も他の肉體と同様に、活動の盛んなる時あり、又安靜なる時ありて、睡眠中は、即ち精神も亦安靜なる時なるが、この時にありては、自我も亦休息するが故に、精神を統括すること極めて緩やかなれば、意識の流れは、殆んど無秩序となる。加之、一般精神活動の遅緩なるが爲に、幻覺を生じ易く、恰も戰亂の状態に比すべし。これいはゆる夢中の現象なり。こゝに面白きは、吾人の精神には、新らしき經驗も、舊き經驗

もありて、その極めて舊き經驗は、醒覺時には、意識の流れにつれて顯はれ出づること稀なるに、夢中にありては、これが常に浮かび出づることなり。その精神の底に深く潜めるものは、いはゆる潜在意識と呼ぶものにして、之を有形の資産にたとふれば、意識の中に流れをなして活動しつゝあるものは、現在流通しつゝある資産にして、金庫の底に深く藏めて不時の用に供するものは、潜在意識なり。この金庫中の潜在意識は、自我てふ主人の監督のゆるめるか、はたその精神てふ資産に變動のある時にあらざれば、容易に流通することなし。されども、時としては、これが現はれ來りて、人をして奇異の思ひをなさしめ、或ひは、人間精神の神秘的なるに驚かしむることあり。

元來、吾人の精神活動は、恰も社會の活動の如く、もし意識の中にあらはるゝ觀念といふものが、銘々勝手に活動して更に、之を統一することなきときは、いはゆる無政府の状態にして、之に反して、一の主權者ありて、各員を統御して相協同して活動せしむれば、社會はこゝに統一的の行動をなすに至る。これと同じや、精神にもその中心となりて意識を統一するものあり。これが即ち自我

にして、國家に於ける主權者に相當するものなり。この自我といへるものは、平易にいへば、自己といふ意識にして、常に精神の活動を統一するのみならず、自發的活動を起し、之を末梢部に傳へて變化を起さしむ。人格といふものは、この自我の下に立ちて、その目的に向つて統一的の活動をなす精神の狀態に名づくるものにして、これ即ち、主權者の統括せる國家に比すべきものなり。さて、この精神が如何なる作用をあらはすかについて考察すれば、普通にこれを知的方面、情的方面、意的方面に分つ。その知的方面は、先づ外界より來る刺激を受けて、感覺を生じ、その刺激の方面に反應して、原因を明かにするに至りて、知覺となる。かくして、外部と關係を絶つも、なほその印象を腦裡に留むるに至れば、之を觀念と呼ぶ。この感覺こそ實に精神發達の基礎となるものにして、恰も身體に於ける食物の如し。この觀念を永く把持して、時に應じて之を再び思ひ出すことを得べく、或ひは、想像をなすことを得べく、更に個々の觀念を分解して、その内容の内より、共通のものを取りて之を統一して概念となし、或ひは、判斷し推理することをなす。

推理とは、既に知られたる断定より未だ知られざる事物現象について断定し、或ひは、既に知られたる原理より、之に屬する他の事實を確むる作用にして、吾人の知的作用は、此に至りて、その極に達せるなり。而して、知識といふ語は、ある時には、内外の刺激を受けて之を感知する作用にもいひ、また、理解することを目指す場合あり。更に、その感知し、理解したる結果を指すことあり。この場合には、知識と科學とは同一の意義となるものなり。

丙 人間の精神 (二)

ながむればいとど物こそ悲しけれ

月は浮世のほかど聞きしに (後惠)

同じく、大空に冴え渡る圓かなる月なれども、あるは之をながめて、我が身の來し方行く末を思ひ、あるは缺けたることなきを喜ぶ。一は之に對して悲哀の涙を濺ぎ、一は之に對して、歡喜の情を起す。これ觀る人の心の調子によるものにして、これやがて感情なり。そも、この感情には快と不快との分極あり。

りて、精神の發達するに従ひて、その内容を異にするものなり。今こゝに人間の感情の普通なるものを擧ぐれば、先づ恐怖あり。憤怒あり。同情あり。愛情あり。更に理性的感情あり。就中、宗教的情操と呼ぶものは、もと人間以上のものの存在することを信じ、之に對して驚怖せるより起れるものにして、遂に之を嘆美し、依頼し、崇拜するに至れるものなり。ペインは、嘗て宗教的情操は、之を分解すれば、宏壯の情、恐怖の情及び愛より成れるものにして、宇宙勢力の大は、宏壯の念を起さしむ、この主宰力は無形の神靈なるが故に、現實界の壯大と詩歌の趣味との助けを借りて、之を人間想像の範圍内に移し、又吾人のこの世に於ける位置の、薄弱不安にして、何物にか依り頼まざるべからざること、は、畏怖の念を起さしむるの原因となり、愛情は、神を仁慈の方面より見るによりて加はるものなりとせり。

これまでも屢述べし如く、感情は精神の調子にして、人間生活に最も切實なるものに對しては、著しく興奮し、甚しき時は、その思念するところのものが、ありありと眼前に形をあらはし、耳邊に耳語するを覺ゆるに至ることさへあり。

されば、學術上の研究などには、固より精神の冷靜なるを要すれども、元來、人間生活なるものは、乾燥無味の境涯たらんよりは、變化もあり趣味もあること、恰も、彼の晝夜四季の變化あり、且つ、花咲き鳥鳴きて自ら風情あるが如くなるを要するものなれば、精神の調子たる感情は、亦決して輕んずべきには非らざるなり。特に彼の愛情の如きは、自己と他人とを融和して、一體となし、他人を視ること、自己の如くならしむるものなれば、佛教にては、慈悲と呼び、無我の愛と名づけて、之を重んじ、耶蘇教も亦博愛を以て、唯一の教義となせり。その他知力的情操の如きは、人間を上げまして、ます／＼學術の發達を來さしめ、倫理的情操は、善を愛し、惡をこらし、いはゆる良心の發達を助く、もし試みに、人間精神の作用にして、この感情なしとせば、人生は果して如何なるものなるべきか、さりながら、單に知り、感ずるばかりにては、何の進歩もなく、恰も唐臼をふむが如くなる譯なり。然るに、こゝに亦意志といふ作用ありて、常に何物かの缺乏を感じ、如何にもして、之を満足せしめんことを欲す。これいはゆる欲念にして、既に之を充たすことを得れば、更にまた他の缺乏を感じて、之を充さんこと

を欲す。これ實に意志作用にして、よそ意志作用の主なるものは、自ら目的を定めて之を充さんことを要求するのみならず、遂に活動して之を實現するにあり。而して、その目的物は即ちいはゆる理想にして、その理想は、もとより精神全體の作用によりてあらはるゝ所なれば、人々によりて異なるべきは勿論、同じ人にて、時々變化しゆくものなり。たとへば渴したるものは、水を得んことを理想とし、飢ゑたるものは食を得んことを目的とすべく、既にこれを得れば、更に他の物を得んことを理想とするが如し。かくの如く、その時々個々の事物に對する目的にあらずして、更に、これら個々の理想の由つて來るところの人間一生の理想あり。これ即ち最高理想にして、この最高理想は、實に繪畫の背景の如く、これによりて、その人の價値は定まる理なり。さり乍ら、この最高理想を實現すべき意志作用にして、薄弱ならんには、いはゆる「畫ける餅の如く何の役にも立たざるなり」。

なほ、こゝに論述する要あるものは、自我が掲げし最高目的なるものは、少なくとも、その時代に於ては萬人共通のものならざるべからずして、この理想に違

へる欲念はこれやがて小我の要求なれば、これをばつとめて、滅却せしめざるべからずとなすことこれなり。

いふまでもなく、精神作用の中心となるものは自我にして、こゝにいふところの意志の要求も、歸するところ、この自我の要求に外ならず。然るに、自我は、他迄も、この自己を保存せんことを要求するがために、種々の欲念がはたらき、これがために、大理想に違へることをも要求するより、こゝに惡といふものも生じ、苦痛も生ずるものなれば、この個人的意志を滅却すべしとはなすならん。而して、彼の佛教の小乗教及びシヨ、ペンハウエルなどの説は即ちこれなれども、自分の住家と隣りの家とを共同にすることが出來ざる間は、自我の念は滅すること能はず、特に精神作用は皆夫々の必要ありて現はるゝ者なれば、之を滅却するは、性にさかへる手段なり。況んや、大理想なるものも、もとこれ精神の作用に出づるところ、知識を顧問として意志が最後の欲望を掲げしものなるに於てをや。

丁 總括

述べて此に至りて、さて人間の本質如何と願みれば、その身體的方面は固より精神的方面に於ても、ともに宇宙間に於ける最高の地位に達し、その智の方面は遠く天體の運行、星辰の本質をも觀測し、深く地球の内部を洞見し、微を發き細を闡かにし、その情の方面は、宇宙を美化し、人生をして趣味あらしめ、その意志の方面は、世界を理想化し、自然に従ふのみならず、亦よく自然を制し、かくの如くにして、この宇宙をして眞善美の眞相を遺憾なく發揮せしむることを得たり。既に、この性能を具有せり。豈、他に求め、他に依頼し、自らを卑下して、無能無氣力なりとするの要あらんや。もし、この人間精神の外、更に萬能なる神てふものありとせば、それは、個人の精神を統合せる一大精神に外ならざるなり。

第三問 人間の運命

同じ人間に生れてあり乍ら、一は榮華の裡にこの世を送り、思ふ所爲す所悉く我が意のままなるあり。一は蹉跎轉軻、最愛の妻に離れ子に別れ、爲す所は悉く豫期せる所に違ひ善を行ふもの必ずしも榮ゆるにあらず。惡をなすもの必ずしも亡ぶるにあらず。一は僥倖に榮達し一は不慮の災厄に沈む。これらの状態を觀じ來れば、人間境涯には條理てふものは無きか、天道果して是か非か。將た人間の運命てふものは、生れ出てざる以前に定まれるものなるか。この世は無常たのみとするに足らざるかの感を抱さざるものは無かるべし。この方面こそ靈魂の不滅てふことと共に、實に從來の宗教が生命とせし所に於て、この謎が解決せられざる間は、人間は眞の慰安を得ること能はず。而してこの運命てふものは、吾人が生活しつゝある人間社會の本體を明かにし、吾人が個體の本質を明かにするによりて始めて之を解決し得るものなれば、暫くこゝに、社會の由つて成る所以、社會の状態及び社會の内部に存する條理を究めざるべからず。

甲 社會の組織

吾人が社會に生存するや、内に妻あり、子あり、父母あり、兄弟あり。外に隣人あり、朋友あり、他人もあれば親戚もあり。そのみならず、上には君主あり、政府ありて、社會と呼ばれ國家と稱せらるゝ團體あり。更に廣く見渡せば、貧富貴賤の差別あるは更なり、勞働者あり、學者あり、官吏あり、商人あり。自己は自己一人にて體軀は大なるも小なるも、一人前の人間なれば、思ふ儘に濶歩し、思ふまゝに起臥して、何をすることも何を思ふも勝手次第になるかと思へば、さる自由なる譯には參らぬと、心の内より抑へるが如く、外より牽制するが如く、風俗習慣、法律制度、親戚故舊、家族、交際、實にうるさき次第なり。かゝる面倒なる不由の社會、さてはその内に存する風儀制度などいふものは、抑も誰が作りしか、人間社會は果して生活するだけの價值あるか。社會には何か一定の理法の存するか。オーガスト、コント氏より來りて予輩にこれら研究の指導を與へよ。氏は夙にこの點に目を注げり。その炯眼には何人も敬服せざるを得ざるなり。

り。さて、地球上に人類の發生せし場所に就ては、一源説と多源説とあり。或は樹枝説、水波説などありて、言語學、人類學の上より種々の異説を立つるものあれども、今日にては多源説を取るもの多きが如く、かゝる議論は何れに定まるとも、吾人の知らんと欲する所は、社會てふものは如何なる動機より、如何なる順序を経て成れるかにあり。先づ男女親の存在せしは争ふべからずして、之が已に社會的の狀態にてありしといふべく、かくて二人以上のものが同時に同處に協同して生活する單純なる群より、こゝに婚姻といふ事實があらはれて、家族の關係となり、更に血縁の關係ある部族を生じ、稍進みては、人意的社會即ち部落、市府、國家となりて、現在の狀態に達せるが如し。而して、その基く所は、生物はすべて自己保存の本能を有するが故に、之が主要の原因となりて營養、生殖慾のために自然的に發生し、漸く進みては之に精神的方面の加はりて意識的に出て來りしものなりといふことを得べし。予輩は、人類社會の狀態を明かにするためには、生物學の助けを借るの最も必

要なるを認むるなり。抑、最下等の動物——即ち單細胞の生物はその組織は簡單なるも、成長、營養、生殖等の生活現象をあらはし、自己を保護し行くが故に、之をば第一階級の個體といふべく、次には幾つかの細胞が集まりてその間に分業的の生活の行はるゝ者あり。之を第二階級の個體とし、更に進みては、ヒドラの如く稍複雑なる生活を營むあり。これ第三階級なり。これより稍進みて高等動物に至れば多くの機關は更に相集りて、分業的に而も尙一個體として生活作用を營む。人類の如き即ち之に屬し、之を第四階級となす。予輩は此等の個體を呼んで單獨的個體となす。而して尙一層進めば、有形的には各個體は夫々獨立して存在するが如きも、その間に無形的の織緯——個體と個體とを連絡する關係てふ織緯ありて、これら個體は、この織緯によりて互に氣脈を通じ、相頼り相助けて生活をなすものあり。之を團體的個體と名くべく、人類其他蜜蜂、蟻等これに屬す。かくの如く階級に上下の別あり、その組織に疎密の差ありと雖も、その間に、團體の成立する要素たる、一貫共通の性質ある事は多くの事實によりて知ることを得べし。生物は又、外界の刺激に反應して、

その性質を變化する先天性を有するがゆゑに、細胞は種々の位置、状態に應じて、その構造官能を異にし、之が爲に血管系、呼吸系統などを生ずるに至る。これ實に生理的分業の行はるゝ根元なり。而して分業の行はるゝによりて次第に進化をあらはし、且分業愈々複雑となるにつれて之を總括し、之が統一調和を司る器官の必要を生ずるに至る。神経中樞の出て來れるは蓋し之がためなり。之を人類社會の状態に比するに實によく類似するもの有ることを知る。即ち人類が集まりて社會をなすや、その間に分業行はれ、之が爲に進化を催し、而も亦關係の複雑なるに至れば、之を統一するに中央政府の如きものを有するが如き、その状態、進化の経路更に異なる所なきが如し。更に生物が相集まりて團體を造る有様を視るに、寄生動物の如きは、未だ團體生活といふを得ざれども、少しく進めば相異なりたるものが集まりて、而も兩者ともに余りに害を受くること無くして共同生活をなすものあり(略奪鷗)又互ひに利益を受けつゝ共棲するものあり(イソギンチャク、と、ヤドカリ)されども、これらは何れも偶然的、一時的のものに過ぎざれども、更に進めば、ある動物が他の異なる動

物を馴らして之を利用し、而も使はるゝ動物も亦之が爲に利益を受け、その結合は意志に基くあり、之を「ドメスカチオン」といふ。これより更に進みて相類似せる生物が共同生活をなすに至れば、その間の關係は益密接となる。この團體にも亦種々あれども、その結合の動機は營養、生殖の二作用にして、更に高等なる動物に至れば、之に精神的要素が加はりて、單に營養上の都合や生殖上の便利のためのみにあらずして、智をみがき、徳を修むるため、換言すれば、各自の人格といふものを修養し發展して、人間生活をして、趣味あらしむるための舞臺たらしむるに至り、その團體は、一層鞏固となるものなり。

人間社會の組織關係は、おほむねかくの如し。もしそれ現代の國家てふ團體が更に合同して、一大社會を造るに至るか否かの如きは、遠き未來の問題にして、たゞ、世界は漸次共通ならんとする傾向あることを認むるのみなり。

乙 社會心

人間が集まりて共同生活をする時は、各個人は、互に自己の思ふまゝに行動す

ること能はざると、互に精神上に感化といふものが行はるゝために、各個人の精神を調和融合したる一種の團體精神といふものが生じ來るものなり。之れが次第に、團體の發達するにつれて、漸次に發達して、恰も別に社會の各員より以上に意志を有する者の存在するが如くなる、これを社會心とはいふなり。之が外にあらはれて種々の制度となる、國民性といふも必竟、この社會心にして之については、ルボンフィエリなどは、人種に従ひて夫々特殊の精神ありて、その精神は、ある國家を成せる一人種の全體を包容せるものなりとし、ポリエイ、パランドの如きは、一國民を包含する如き大精神は有るべきものならず、只特殊の社會にのみ氣質として存するものなりとしたれども、軍人社會、學者社會に於ける氣質の存すると共に、國家全體として——即ち國家といふ大なる社會としても、共通の社會心の存するは否むべからざる事實なり。而して、この社會心の生ずるは、社會その物が已に精神上的の織緯によりて個人を連絡せるによりて成立するものなるからは、之がために個人の精神が互ひに統合調和せられて生ずるは固よりなるも、その中心となるべきものは、知力若くは權力

の優越なる少数の人の思想なることあり。また時としては非常に高潮なる時あり、時として平板なることあり。如何なるにもせよ、已に社會心となれるからは、各個人の精神と社會の精神とは共通の性質を有し、全體と部分との關係を有するものなる事、恰も一條の糸によりて貫ける珠數の如し。さて、この社會心の實質を稽査するに、保守的方面と進歩的方面との二大思想の潮流ありて、最初ある必要より生ぜしものが慣習と成りて傳はるものあり、これ人心の感情に基くものにして、一旦成立せしからは、固定して容易に變改することを欲せず。之に反して個人の知力は、合理的に舊慣を打破し去らんとする傾向ありて、之がために衝突を來し、時としては急劇に、時としては徐々に改造せられ、その結果一段の進歩を見るに至る。

社會の制度、風儀、輿論などいふものは、皆社會心が、最初ある境遇、事情のために、外にあらはれて一の法律的意義を有するに至れるものなれども、積習の久しき、遂に現下の境遇に適切ならざるに至り、之が爲に、却りてある他のものが自己を抑制する如く感ぜらるゝより、こゝに變改の必要を生ずるなり。されど

丙 總括

も之を變改せんことは、複雑なる社會にては容易に行はるゝものにあらず。之を要するに社會心なるものはその成立及び内容より考察する時は、各個人の精神が、共同生活をなすが爲に生じたるものにして、その一旦成立固定するや、却りて個人の精神を溶蝕するに至る。吾人が良心と呼ぶものは、即ち各自が社會に於て養成し來りし性格にして、歸する所社會心に外ならず。

人間社會は、實に複雑にして、その組織は、全然有機體に同じく、その中に生活する各個人は、恰も一個一個の細胞に異ならず。而して有機體に於ける各細胞は、與へられたる地位にありて與へられたる養分を吸収して、發育するのみならず、人間は、自ら活動して、發展することを得るものなれば、この意味に於いて、運命は自己がつくるところなりといふことを得べし。さりながら、人間は、ただ物質的生活のみによりて存在するものに非ずして、精神的な生活こそ、人間の人間たる所以なれば、よく社會の状態を察し、社會精神の由つて來るところを

本論 陸の解決

明らかにし、その精神の潮流に乗じて、進まんと心を心がけざるべからず。これをこれ省みずして、たゞ自己の思ふままに人生てふ大海に乗り出でんには、自己の志望を遂げて彼岸に達すること能はざるべし。この社會の潮流に乗ずる者が好運兒にして、之を觀測すること能はずして常に潮流にさからひて悲境に陥る者が不運兒なり。運命とは實にこの社會の精神的潮流に外ならざるなり。而して、この潮流を見出すと否とは、一に自己の力量と活動とによるものなれば、この意味に於て、運と不運とは自ら招くところなりといふことを得べし。

さりながら、人間には祖先以來の遺傳によりて、自己の身體にも精神にも素質といふものありて、これがために、不幸を免かるゝこと能はざることあり。これはいはゆる先天的のものなれば、それをば、それと悟りて、自己の力にて改善し得らるるところまでは、務て、その素質を矯めざるべからず。捨つる神あれば、また助くる神もあり。その助くる神にめぐり遇ふは、自己の活動による外なければ、みだりに天を怨み、人を尤むることをせずして、修養を積み、發展をは

かるべし。歩るく、犬が棒にあたるとは、これをこれいへるなり。

第四問 靈魂の本質

人間の靈魂は、肉體とは全く離れて、或ひは人魂となりて、空中を飛び、憎しと思ふ一念は、怨靈となりて他人を害し、肉體の死して後も、なほ幽靈となりてあらはれ、或ひは又、地獄に陥りて無量の苦しみを受け、天堂に上りて無限の樂しみを享くるものなりとせるは、古來世俗の、一般に信ぜしところなり。靈魂は果して不滅なるか、將た滅するか。

甲 靈魂の意義

そもく、靈魂といふ語は、時には、人間の精神とか、心とかいふ意義と同様に用ふることもあれども、哲學上や、宗教上にては、肉體とは別なる精神の體といふ意義に用ふるを常とせり。而して、原始時代の人類が、如何にして、この靈魂といふ考を起せるかについては、諸家の説あれども、スペンサー氏及びタイラー氏

の説は、最もよくこの起原を説明せるが如し、タイラー氏の説によれば、原始人類の頭を悩ましたる問題は、第一彼等未開の人民は、生者と死者と、其形は些も異なるところなきに、而も生者はよく躍り、死者は然る能はず、何者がかゝる差異を生ぜしむるものなるか。或ひは、人をしてよく眠らしめ、病ましめ、死せしむる所のものは、果して何者なるかといふ疑問にして、第二は、夢にあらはるる人、幻影に形をあらはす人は何者なるかといふ疑問なり。この疑問に答ふるために、茲に未開野蠻の人民は、肉體以外に、精靈或ひは魂魄といふものあるによるとなせり。即ち靈魂といふものは、一の幻影的實在にして、其の形は人の如く、たゞ、人のよく之を視ること能はざるのみ、その本質は、影の如く、湯氣の如し。而して、或る時は、人體を離れて浮遊し、ある時は、人體に入りて精神活動の根原をなす。その人體を離るゝや、諸所を漂動し、他の人の眠るものあれば、その體内に入りて、その身體を支配し、その人に魂魄として現はれ、あるひは、人體のみならずして、獸類の體内に入り、且つ無生物の中にも侵入することあり。されば、眠れる人が、夢より覺めんか、夢中、自己本有の靈魂は、暫時他に漂遊し、他

人の靈魂が代はりて、自己の體内にありしとなし、又、日中にて、幻影、幻覺に於いて、人の形を視ることあり。その他人の死せる時、其死者の俤の、残れる家族に、夢に於て、あるひは現に於て、屢現はるゝことありと解釋したりしなり。スベンサー氏も亦略之と同様なる説を述べたり。曰く、原始人類が最も注意をひきしものは、生死の現象にして、彼等は第一に、生死の區別となるものは、呼吸にして、呼吸止みて、心臟の鼓動止み、之につき、體温も去る。されば、人間には呼吸器の如くにして、胸部に宿れる生氣乃ち靈魂てふものありて、身體をして活動せしめ、精神をして活動せしむるものなりと想像せしなり。且つ夢中に現はるゝ諸種の現象よりして、人間の肉體の内に宿れる靈魂が、肉體を離れて遊行するものなることを考へたりとなせり。かくて、この靈魂てふものは、何處より得來るものなるかといふことに就ては、第一、靈魂は、神がこれを創造して、出産の瞬間またはその少し以前に、その肉體に宿らしむるものにして、肉體はこれによりて、初めて靈魂を有し、種々の活動をなすに至るとする説あり。これは専ら神學上にいふ所なるが、更に、靈魂と

ても、生殖の作用によつて、肉體と同様に生産せらるゝものなりとする説あり。又、靈魂は、人間若くは、他の動物の體内より、他の肉體へ移り宿るものなりといふ輪廻説ありて、人間が死すれば、その靈魂は、この世に於いてなしたる業の善惡の程度によりて、人間以上のものともなり、又他の人間、若くは動物の肉體に轉生するものなりとせり。この思想は、埃及人に始まり、靈魂が、かくも陸上、水中、空中の各種の動物を一巡し終るときは、再び人間の肉體に歸り來る。その一巡には三千年を要すとせり。

印度の思想にても、亦その始めより、物質の外に精神あり、而も精神の根原たる靈魂ありて、善惡の因果によりて、輪廻すとなしたりしが、佛教にては、小乗の方には、我といふもの即ち靈魂の一定不變に存在することを説けども、大乘教に至りては、この靈魂即ち我といふ本態は、決して定住不變のものに非ず、從つて輪廻轉生するものに非ず。たゞ後までものこるものは、業なり。この業は、人間がこの世に於て、口に發し、心に思ひ、身を動かして行へるすべてのものを包括せるところにして、永劫にわたりて不滅なりとして、倫理的の意義の著るし

く加はれることを知るべし。乃ち之によりていへば、佛教は無靈魂説なり。

乙 靈魂の不滅

キルヒネル氏は、かつて靈魂について、次の如く論じたり。

精神の不死といふことは、吾々の精神上の人格が永く持續するてふことを意味するものにして、精神が、未來に於ても、現世に於けるが如く、生活すといふこととにあらざり、即ち吾々自らが、自己の意志を以て、後の世に生活せんとすることなり。故にかゝる信仰は、すべての國民にひろがり居れり。而して之を三つに分つことを得べし。

- 一は希臘に行はれたる舊約全書の説にして、精神は、人の死後天國に至るとなす思想なり。
- 二は印度及び埃及に行はれたる説にして、即ち靈魂は、輪廻するものなりとせる思想なり。
- 三は耶蘇教にいふ所の説にして、精神と肉體とは、分れて、精神は天國に到る

となすものなり。

これら靈魂不滅の説の行はるゝ所以を證明するものは、次の諸點にあり。

- 一 植物界と比較するに、人間は死するなるべし。
- 二 多枝の個體は、その人が未だ目的を達せざる中に死す。これ、神が人に生命を與へし趣意即ち愛に悖れるものにして、もし、精神が未來に生活を持続せざるものなりとせば、人は他の動物よりも劣れり。
- 三 精神が死滅するものなりとせば、道徳は、實に不充分なるものとなるべし。
- 四 現世にては、幸、不幸あり。之を補ふためには、未來に於ても不死なりとせざるべからず。
- 五 すべての人は、向上的精神を有するものなれば、この精神を満足せしむるためには、精神は永劫不死なりとするを要す。
- 六 一たび成立せる物は、中途に滅失するものに非ず。精神を、單一の物質とすれば、決して破壊せらるべきものにあらず。

シユルチエー氏は、また、比較心理學において、死といふことについては、身體は、

只物質が形を變化するのみ。而して、吾人は、精神を以て、一の力として認むるものなれば、自然科学の見地に立つときは、力といふものは、物質と同様に滅失するものに非ずして、形を變ずるまでのものなれば、死てふことは、身體と精神とを、他の新しき形に變ずるといふまでのことにて、これによりて、滅失せりとはいふべからざるなりといへり。

予は、この靈魂に關しては、すでに、その大體を述べ盡したれば、更に、茲に論辨を試むる要なしといへども、人間の心には、果物の核の如く、一つの不變のものありて、これが現在のままに、身體の死滅せる後までも傳はりて未來に於ても、現在の如き意識を有するものなりとする世俗の信仰をば、どこまでも打破せざるべからざるを信するなり。もしかくいはば、人間生活に於ける倫理道徳は、非常に薄弱なるものとなり、加之、人間をして、現世の生活に於ける物質的幸福と、不幸と精神的幸福と不幸とを一致せしむること能はずして、善意を以て善行をなせるもの、必しも物質的に、幸福安樂を得ること能はずして、この世は、とかく、我が怨を恣にするが利なりとするに至るべきを憂ふるものあるべし。

予も亦しか考ふるなり。されども、人間の人間たるところは、たゞ自己一身のみ愛せずして、自己の妻子々孫をも愛し、眼前の事をのみ考へずして、未來を考ふるといふことにあるものなれば、現在のまゝの精神生活は、未來世に於いては、これあるべきにあらずとするも、自己の身後のことを考ふるからは、依然として、人間は、未來にわたりて自己の身體も精神も滅するものにあらざることとを了解するを得べき理なり。もし、これをしも更に願ふることなしとせば、かゝる人間は、最早、人間には非ざるなり。

結

論

野邊の色も春の匂もあしなべて

心そめたる悟りにぞなる

(四 行)

一 宇宙觀 (二)

幾千萬年の昔は、宇宙が如何なる状態にてありしか、われらはこれを知らざるなり。されども、學術の説明する所によりて、この宇宙は、其の初め、如何なるさまにして發生せしかを推測することを得たり。その軌近科學の吾人に教ふる所を擧ぐれば、

- 一 最高熱度の降るにつれて、種々なる化合原子が生じたりとせば、最も原始的状態に還元せしむるには、その當時に於けると同一の熱度を與へざる可からず。
- 二 この地球上に於いては、最高の熱度は攝氏二〇〇〇度より以上に昇ることなし、然るに、太陽周囲の熱度は一〇〇〇〇度以上に達す。
- 三 白光星及び星霧は、太陽よりも更に高熱を有すべきことを推斷するを得べし。
- 四 化學的分拆によりて得べき原子の單純と複雑とは熱度の高低に比例す。

五密度の減少は熱度の増加と同一の結果を生ず。
 六地球を單位とし、之より熱度の高き星辰に上るに隨ひて元素の數を減じ、
 白光星に至れば僅かに水素と窒素との二元素のみなり。
 七故に終極の物質は單純なる一元素にして、熱度の差異によりて種々の様
 状を呈せるものなりと推斷するを得べし。
 實にかくの如し。而してこの最も單純なる物質は、電子 (Electron) と名づくる
 活動的の極微なるものなることを知り得たり。かくて、この單原的物質は空
 間に彌蔓せしが、固有の廻旋運動のために衝突して高熱を發し、星露の形とな
 りて遂に今日の如くなれるものなりとは、最近宇宙進化説の教ふる所なり。
 更に生物の發生については、地球が、有機物の發生に適當なる状態を呈するに
 及びて、無機物質より微細なる原形質が生起し、これが漸次發育して細胞を生
 じ、遂に種々の生物となり來りしものといふに歸せざるを得ざるなり。進化
 論は、この生物の種原及び發達の徑路について、明確なる説明を與へ、その結果
 として、從來の人間中心説を打破したり。かくて、なほ生命精神なるもの、根

原は細胞を構成する原形質とともに物質に固有の者にして之が漸次進化し
 て、人類の如き精神を有するに至れるを推理し得たり。ヘツケルは、嘗て Die
 Weltanschauung に於て精神生活の現象は、肉體の生ける本質、即ち原形質の中にあ
 る物的變化を結合せしむる者なり。而して精神作用に必要な本質たる所
 の原形質を、精神形質といひ、人間及び高等動物にありては、この精神形質は、分
 化して神經即ち細胞纖維に於ける神經形質となれりといひ、尙吾人は物質は
 精神なしには存在し得ず、働き得ず。精神も亦、物質なくば亦存在し得ずと考
 ふるものなりとて、物質と精神とは、宇宙本質の二つの根本的屬性なりとせり。
 これ實に科學者の見解を代表せるものにして、スピノーザの平行一元論と異
 なる所なきは、ヘツケル自己が已に告白する所なり。
 之を要するに、科學の方面より到達する宇宙の根原は、物質と「エネルギー」の
 世界にして、この二者は、相依存するものなることを知るのみ。而も生物の生
 命精神は、この「エネルギー」の進化發達せしものなるか否かは、尙未だ確定せる
 ものとはなすべからずと雖も、あらゆる物質が、最初の電子より進化發育せる

と同じく、その「エネルギー」が進化發達して精神生命となりしことを推斷することを得ざるにも非ざるべし。現にオストワルドは「エネルギー」と精神とは同一物を両面より見たるに過ぎずとなし、化學者は亦原子が親和、反撥の性を有するは、これ幼稚なる精神——愛と憎との存することを知るに足るべき現象なりと云へり。

さはあれ、實に不可思議なるは宇宙なり、自然なり。之を知の眼鏡によりて窺へば、彼等の本體は、已に述べしが如く、遠遠にして雲深く、動もすれば、その真相を誤認せんとす。之を情の眼鏡に映せば、その高大悠遠にして、而も微妙なるに眩惑して、直ちに、不可思議なる、あるものの顯現に歸し、一種の靈感にうたれて、眞理を探ること能はざらんとす。もしそれ意志の眼鏡を以てせんか。遂に之を理想化するに至らん。ラスヴェイツ曰く、自然科學の世界は、眞智の一部のみ。即ちその宇宙は迷妄ならざるも、完全ならず。人あり、譜を書き了りて、この譜は音樂なりと云へば、そは誤まれり。譜は正しかるべきも、猶音調を缺げはなりと、然らばその全體としての宇宙——音調と譜と備はれる音樂たる

べき宇宙の眞相は、果して如何なる手段によりて知ることを得べきか。

二 宇宙觀 (三)

科學の世界は、一部に止まるとせば、之を統一してその全體を考察し、その間に存する根本的原理を發見せんとするものは何なるか。これ即ち哲學ならずや。この見地よりして、自然——世界——宇宙を觀る時は、果してその眞相を看破することを得べきか。前にも述べし如く、經驗的立脚地より宇宙を觀察する時は、物質は空間時間の中に在存する活動的(可能的)のものにして、生ずることなく滅することなく、其の實體(Substance)は常住するも、その性と形と状態とは常に變化す、その變化はある原因より必然的に起る者にして、その關係を因果律といふ。而して吾人の眼前に現はるゝものは、時間空間中に在りて、因果といふ鎖を以てつながれたる物質の状態と、その變化とにして、吾人は之を現象と呼び、この現象は物質の内面的に潜在する、或る物の發表なりと見て、そのある物を力と名づく、この力は亦働く能力として、「エネルギー」と呼ばるゝことあり。

り。然れどもこの力てふものは直接に感知すべからざる者にして、只之が存在を推定するに止まる。されば科學を以て單に現象そのまゝを研究の對象とするものとせば、この力の如き直接に感知する能はざるものをば深く研究すべきものに非ずとなすものあり。

更に經驗的の外に立つて、宇宙を考察するものは、即ち卓絶的見方にして、この見方によれば、吾人の眼前に變化消滅するが如く、見ゆるまゝの現象は、必竟宇宙の影像に外ならず。何らか眞實に存在するもの、即ち意識中の表象を離れたる物それ自身なかる可からずとなす。かくの如く現象以上に實在ありとして、之を研究せんとするは、全く抽象的の理論に屬し、而も吾人の認識の對象となるものにあらず。然れども、吾人はその現象の千差万別なる所以の理由を質さんことを欲するものなれば、この欲求を満足せしむるためには、勢ひ何らかの説明を與へざるべからず。こゝに於いてか、形而上學てふもの、必要を生ずるなり。この形而上學てふものは、人によりて異説あれども、予は形を離れたる原理——個々の原理を綜合統一する所の原理の學問なりとし、之を哲

學と同一の意義に解し、科學の供給せる所を綜合し推理して、一つの原理に纏め、以て、吾人の求知心を満足せしむるものとなす。今もし、この卓絶的見方による時は、この宇宙の本體は、一元にして、活動的なり。而して物質と精神とは、如何なる状態にてかは、固より認識——主觀と客觀とを起絶したるが故に、知ること能はざれども、融合調和して一に歸し、發しては物心並行して諸種の現象となる。その所謂現象を統一せる原理ともいふべきものが、やがて實在にして、即ち宇宙の本體なり。言をかへて曰へば、個々の現象——風が吹く、花が咲く、日が輝き、月が照る。人間が怒り喜び、禽獸が鳴き叫ぶ。かく目に見、耳に聞く所のものは、固より物と心との間に成り立つ一つの表象に過ぎずして、恰も鏡に寫れる影の如く、眞實なるものに非ずして、實際に存在するものとは見るべからず。その實際に存在して永遠に消滅すること無きものは、この現象——千差万別の現象の起る所以、現象の現象たる理由を説明するに足る所の原理の外にあるべからず。已に原理といふ形を離れたる推理のものにして、全く無形なるものなり。哲學者は、之を呼んで實在となし、絶體界となし、眞如實相と

呼ぶ。されども、これ固より認識を越えたるものなれば、スベンサーは宇宙の實在を不可知的となし、易に之を太極といひ、老子は之を無名と呼び、カントは物其自身と名づけたり。

之を要するに、宇宙は主観心と客観物との關係より成立するものにして、この二つのものが融合(統一綜合)せるもの即ち實在なり。之を一面より見れば、現象界にして、一面より見る時は即ち實在界なり。分けて見れば、個々の物と心とにして、合して見れば一つの原理にましまりて實在なり。而して宇宙成立の條件即ち主観と客観との關係の統一綜合を、可能ならしむる原理は、歸する所主観にして、これを名づけて宇宙の大精神となし、或ひは呼んで神となす。この大精神は、吾人個々の精神の統一せられたるものにして、宇宙の創始以來、今日に至るまで相繼續し、時代と共に進化發展し來り、未來も亦永劫不滅なり。もしそれ、宇宙の活動の原理——實在が、如何に發現しつゝあるかについては、目的論と因果論との二説あり。この因果律なるものは、宇宙の現象を、時間の上より見たる續起に關する法則にして、之に二つの異説あり。ヒューム及び

ルの説は、即ちこれらの代表者なりといふ得べし。

而して予輩はこの目的論と因果論との二者は、亦調和せらるべきものなることを信するものなり。但し予がこゝに言ふ所の目的は、固より豫め定められたる、一現象以外の、あるものによりて一意識的に存するものなりと云ふに非ずして、因果的に繼ぎつぎに起る現象の統一綜合せらるゝ所を意味するもの、即ち言をかへて曰はゞ、現象を統一せるものが實在(實在)現象なると同じく、因果的關係の統一せられたるものか、やがて目的なり。故に目的は内に在つて外部にあるに非ざるは固より論なく、従つて全く因果の關係を離れて別に存するには非ざるなり。

かくの如く觀じ來れば、宇宙は無始無終にして、未來永劫にわたりて不滅なり。而もその間に進化ありて、その本體はそれ自身の内に目的を有して因果的に發現しつゝあり。こゝに於てか、小宇宙たる吾人も亦未來永劫不滅にして、絶えず活動して目的を遂行し、一步步々進化の途を歩みつゝあることを知るべし。大悟徹底とは正にこの真相を了得せる謂ひにして、個體の小我は生滅變

化するも、宇宙的の大我は決して滅するものにあらざることを觀得するを得ば、活動の元氣此に生じ、無量の歡喜此に湧出すべきなり。

三 人生觀

エホバの神かつて土の塵を以て人を造り、生氣をその鼻にふき入れて、人即ち生靈（イソラ）となり、園を設けて、その造りし人を、そこに置き給ひしといふエデンの樂園は、今もなほパラダイスたるを失はずば、人間は、この世をうき世などとかこつにも及ばざるべし。されども、吾人は智慧の樹の實を食ひしより、日々に活動もすれば、罪惡をも造りつゝあり。種々の慾望は、絶えず心の内に闘争しつゝあり。この内部の闘争に打ち勝ちて、更に外部に打ち出だすも、外部には又多くの強敵ありて、こゝに再び競争を試みざるべからず。かくして、吾が思ふまゝになることを得れば、この世は安樂境土と觀ずるを得べけんも、世は中々さる極樂世界には非ざるなり。蓋し人生の眞意義は、ゲーテが嘗て論へる如く、善美の生活を遂ぐるに在りて、即ち活動にあり。已に活動がその本體なり

とすれば、苦と樂とは糾へる繩の如く、相錯綜するは自然の理にして、而もその終極の目的は、幾千万年の昔より、遺傳、適應、淘汰によりて、進化し來れる本來の性能を實現するに在りて、この實現は、自己が本來具有せる活動性によりて達し得べく、その活動の一階段ごとに、快感の伴ひ來るは、やがて終極の樂園に近づきつゝあるのしるしなり。

かくの如く觀じ來れば、人生は安樂の境涯なりといふを得べく、予は常に、しかく信じて疑はざるなり。思ふに、人間社會の事物現象は、皆吾人の祖先以來活動せる成果にして、政治、文學、宗教、美術は、實に人間活動の華ならざるはなく、社會の意識と呼び、輿論と稱するものも、亦皆活動の精華にして、天といひ、命といふ、亦これ、この意識輿論の外にあるに非ず。其所謂天とは、一面自然の理法にして、そは宇宙の本體が發現するに、必ずよるべき法則（二）詳しくいへば、人間が生長し、やがて死するも、自然の理法、樹が花を着け、實を結び、風が吹き、雨が降るも、亦自ら然る所（二）これを名づけて天といふ。更に一面より觀れば、天は自ら作る所にして、亦自らもその一部をなすものなり。何を以てしかいふ。曰く、

人間境涯を渡るにつけて、幸と不幸と、苦と樂とあるは、皆これ自個の本性、社會の事情によるものにして、我の造り出だせる所なればなり。されば、歸する所は、宇宙の根本的大法、これやがて天にして命なりといふべきなり。此に於いてか知るべし。人生は苦樂の境涯なり。活動といふことが本質なるからば、苦樂は必ず併存すべく、而もその終極は、自己の本性を實現するにありて、實現の階段ごとに快感ありとすれば、やがては、エホバの神が、太初に吾人を置きし、パラダイスの境涯に達することを得べきなり。

メチニコフは、かつて人性を研究して、最後に斷案を下して曰く、人間存在の終極の目的は、自然的死にあり。而も、人性には種々の矛盾ありて、これより起る種々の危害は、科學によりて救濟せらるゝも、その進歩は甚だ遅々たり。眞の進歩とは、人性の矛盾を除き、自然的死に至るまで、長壽を保たしむるに在り。意識的靈魂の不滅は、科學上承認すること能はず。將來の宗教に於いて、人間を團結する理想ありとせば、かくの如き理想は、必ず科學的原理に基かざる可らず。人は信仰によりてのみ、活くることを得とするも、その信仰は、科學の力

を度外視すること能はずと、氏は、なほ死といふことについて論じて曰く、多くの生物學者特にビチリーワイスマンは、單細胞有機體は不死なりとするも、滴虫の劇しき分割の後、及び接合せざる前に於ける無力は、自然的死亡と見ることを得べし。しかし、接合の後、に於て、再興する點は、普通の死とは異なり。かくの如き意味の不死は、復雜なる構造の水蛭、その他の腔腸動物にもあり。有名なる植物學者ネグリーは、自然界には、自然的死亡なるもの無し。千年以上を経たる樹木の如きも、生活力を失ひたるために非ずして、ある危害によりて枯死するものなりとし、ロエプは、放出されたる海蛸の、成熟したる卵子の受精せざるものは、數時間にして死するを視て、自然的死亡なりとせるも、此の如きは、普通の有機體が、營養分を得ずして餓死すると異ならずといへり。簡單なる細胞にも、ある一種の感覺を有すとは、多くの學者の認むる所にして、ヘッケルは之を細胞靈魂と名づけたり。細胞にして不死ならば、此と共に、その靈魂も、永久に傳へらるべきも、靈魂の不死てよことは、此に論ずべき問題に非ず。之を要するに、純粹の自然的死は、動物界に於いては、全然無きに非ざる

も甚だ罕なり。然らば、その死は如何にして起るか。自然的死にあらざる死は、偶然の危害より起るものなり。ワイスマンは死は種族保存のための順應として起る現象なり。即ち生存の周囲の事情に關し、生物の本性として、必然に起るものに非ずして、老枯したる有機體は、最早生殖することにも生存することにも、適せざるが故に、自然淘汰として死亡は起り、かくして種族をして、絶えず活動せしむるなりとせるも、この種族保存といふ事は、穩當ならず、如何となれば、滴虫その他の下等動物の如き、不死的の者にて、他の危害のために、犠牲となること多ければなり。

而して、人間には、自然的死てふものは在り得といふに止まり、多くは他の危害のために斃るゝなり。なほ老衰てふことは、一つの組織の高等なるもの、又は特殊なる細胞が衰弱して、膨大せる結締組織が、これに代はるものにして、その原因は、貪食細胞、身體の各所にありて自由に運動をなす、大小の二種あり、小なるは骨髓内に生じ白血球として現はれ、大なるは白小球又は固定せる細胞として現はるの働によるものなり。即ち老衰は、主として大貪食細胞が有機體

の高等なる要素を破壊するために起る。之を防止するには、科學的研究の力を以てすることを得べし。今日にては、科學は尙不完全なるを免れざるも、科學的研究は老衰を防止し、人の壽命を長からしめ、人生をして漸次幸福に導くことを得べしといへり。

このメチニコフの説につきて思ひ出ださるゝは、厭世家として有名なるシヨールペンハウエルなり。氏は、宇宙の本體を意志なりとし、意志は盲目的非理性的にして、足ることを知らず。されば、この人生は、苦を以て充たされたる境涯なれば、生を欲する意欲を寂滅すべしとながら、嘗て虎疫の流行してヘーゲルも、これにかゝりて死せし當時、自らも虎疫に犯されて死せんといふ凶夢をみたりとて、ベルリンを去つて、フランクフルト、アム、マインに逃げ去りしことあり。これによるも、長生を欲するは、人間の本能にして、人間の最大目的は、自然的死を得るにありとも考へられざるに非ず。しかのみならず、この世は生くる價值なき境涯には非ずして、苦しみの中にも、何處にか安樂の境涯のあることを知るべきなり。さればこそ、古より樂天主義を抱きて、この世界は至善

至美の境涯なりとせるものもあるなれ。孟子曰く、「盡其心者知其性也、知其性者則知天矣、存其心養其性所以事人也、殫壽不貳、修身以俟死、所以立命也。」と、陶淵明も亦、彼の天命を樂んで、また何をか疑はんと謠へり。實に人生は黄金の境涯に非ざるも、亦苦海にもあらざるなり。その苦樂は活動に伴ふ屬性にして、その終極は苦樂を超脱したる所にあり。吾人は只活動して自己の性能を實現し、以て命を俟つべきのみ。エデンの樂園は、近く吾等の身邊にあり。

四 最後の信仰告白 所謂素人宗教観

満面に笑みをたゝへて、父さまとねだり付く稚兒を、あはれや其處に蹴飛ばして、破れ笠と一本の杖に身の行く末を托して、我が家を立ち出てし西行は、刎頸を契りし友の死によりて、浮世の果敢なきを悟りしなり。大原山の奥深く、方丈の室に世を絶ちし鴨長明は、心に任せぬ浮世を憤りて悟りしなり。九重の裡に榮華の夢を食りし悉達太子が迦毘羅王城を後にして、檀獨山に猿鶴と伍し、無師獨悟の正覺を得しは、衆生を塗炭の苦しみより救はんの大慈悲心に

在りしとはいへ、また人間境涯の眞意義を悟了せんとする大煩悶の極に出てしなり。一木匠の子基督が、妻を娶らず、家庭を作らずして、遂に神の愛子となりしは、詮じ來れば、彼の境涯が人間境涯を悟らしめしには非ざるか。孔子は亂世に出てて位を得ず、民を救ふの志あつて施すこと能はず。屢天を呼び、命を待つ。而して彼等は皆教祖と呼ばれ、聖者と名づけられ、將た大宗教家と呼ばるゝもの、彼を視此を考へ來れば、人間境涯の眞意義について大煩悶を起し、之を大悟して、大信仰を立て、こゝに大宗教を建立するは、古今東西の軌を一にする所なり。されば、世の所謂宗教とは煩悶の餘響にして、この煩悶を解決して慰安を求むる道 方式 心のさまの異なるによりて、或ひは他力教となり、自力教となり、さまざまの形をあらはせるもの、如し。而も彼等の大信仰には確乎として抜くべからず、牢乎として動かす可からざる、人格と同じき力を有する「オリソリチー」の存するは必然なり。この「オリソリチー」こそ彼等の神と呼び、佛と稱し、將た宇宙の大精神と名づけ、天と唱ふるもの、聲にして、目で見ること可からず、手以て觸る可からず、只大悟せるもののみ直觀し、靈感するこ

とを得るものなり。

予は未だ大に煩悶せず、従つて大悟せず、故にまた大信仰を立つる能はず。されども、固より人間なるからは、この世の外に通るゝこと能はずして、如何様にかして、この世を渡らざる可からず。こゝに於いてか、人間は如何なるものにして、人間境涯は如何にして渡るべきかを考へざるべからざるがために、小なる煩悶を生じ來り、之を解決して彼岸に達すべき小なる信仰を立てざる可からず。この小なる煩悶によりて立て得たる小なる信仰こそ、これやがて素人宗教觀なるなれ。

人間が最後に要求する大問題は、生とは何んぞ、之を一面よりいへば、死とは何んぞといふこと、運命とは何んぞといふことの二つにして、宇宙の本體を究め、人間の本性を明かにするも、要するに、この二つの問題を解決して、人生の意義を悟らんがためなるなり。

予輩の信ずる所によれば、この宇宙Ⅱ世界には二つの相異なるが如く見ゆる相Ⅱ現象あり。一つを自然界といひ、他の一つを精神界といふ。草木の花

を附け實を結び、雲行き雨施し、山川の鳴動する、これ自然界の現象にして、饑に叫び渴に泣き、喜び悲しみ、知覺し、推理し、辨別し、種々の動作をあらはすもの、これを精神界の現象となす。自然界の實在する條件は、物質とエネルギーにして、その發動するや必ず因果の關係を以てす。而して、これが實在すること、を認識するは、精神界と交渉するによるの外なきを以て、假りに、精神界を取り除かば、自然界はこゝに滅却すべし。精神界の實在する條件は、それ自身の有する力と表號とにして、力なるが故に活動し、その活動するや必ず言語、文字、身振、動作となりてあらはる。而も之を認識するは、物質に非ずして、精神それ自身なり。故に精神界の實在する條件は、精神それ自身なりといふことを得べし。而してその發動するや、全然因果の關係によるに非ずして、精神それ自身の目的より發動して、而も全然因果の關係を失ふにあらず。故にその活動の自體より起る點より見れば、外部の原因によるに非ざるが故に、因果の關係なしといふべく、また一たび發動するや、その進行の過程を見れば、互ひに因となりて果を生ずるが故に、因果の鎖を以てつながれたるが如し。

自然界に於ける因果の關係も、考へやうによりては、ある一つの物質の中に存する「エネルギー」がそれ自身に活動するによりて、之が影響を受けて他の物質が活動を起すものなれば、その原因は自然界自身にあるが故に、目的なると共に因果の關係なりと見れば、精神界と異なる處なきか如し。たとへば、太陽の放出する熱と光とによりて、風雨晴曇、その他あらゆる現象を生じ、又地球内部の熱によりて、火山地震の現象を生ずるも、その原因、目的は彼自身の物質界にあれば、目的なると共に因果の關係なりといふべし。されば、現代の説明にては、宇宙の進行する過程は目的的なると共に因果的なりとして、茲に調和をなせるなり。されども、自然界と精神界との間には、更に超ゆべからざる限界あり。即ち自然界は自己の考へによりて、その活動を變更すること能はず。必ず然るべきやうにならざるを得ず、ざるからに、自然現象をば、必然的なりといふ。之に反して精神界にては、自己の考へ次第にて如何様にも變更することを得べし。

さて、かくの如く自然界と精神界とを比較し考案し來りて、更に進んで、この物

質と精神との根本は如何なるものにして、且之が如何なる關係を有して存在するものなるかを明かにせんことは、予輩人間の要求なり。これに關する説明には二元論、一元論、その一元論の中にも、唯物論、唯心論、或ひは心物一元無差別論あり。又その發動の關係については、心身は互ひに因果的關係をなしてあらはるとするあり。或ひは、心身は相並行するものなりとの説を唱ふるものあり。これらの説明は形を離れたる形以上の抽象的説明にして、今日の人間の經驗と思惟とに於いては、物と心とは本來別様のものに非ざる一如的實在を、異なる方面より見たるに外ならず。之を外面より見れば物質にして、之を内面より觀れば精神なり。故に物質の存する處精神あり。精神の存する處物質あり。従つてその作用するや必ず並行す、而もその究極は精神——大精神なり。如何となれば、その物質てふものは要するに、色形香味の表象が我の意識によりて統一せられたるまでにて、これらの表象を除けば、こゝに物質界は滅却すればなりとなす。されども、予輩は飽くまでも、經驗の上に立ちて、可及的形を離れずして、研究し得らるゝ限りは之を経験的智に求めんとす

るなり。こゝが素人の最も切に要求する所。予輩は経験の方面より進みて、この宇宙の太初には唯一の物質とある力との渾一せるものが存在せることを知り得たり。この唯一物質は自身の力と、外圍の事情とによりて次第に變化を來し、遂に生物無生物となり、これが次第に分れて今日の如き有様となれることを推理し得たり。これによる時は物質の方面が種々の階級を追うて、人間身體となり、禽獸となり、草木となり、金石土壤となり、空氣となれると同じく、その力も亦之に並行して、人間精神となり、禽獸の精神となり、草木の生靈となり、金石土壤空氣の質となれることを推すを得べし。即ち高下の差別こそあれ、禽獸が食を求むる心も、草木が日光に向ひ、或ひは日光に反く運動をなすも、その根原は人間の精神と同じかるべきなり。かく考ふる時は太初に存在せし唯一のある物は力にもあらず、物にもあらず、力と物との融合せる渾一物たりしなり。而してその渾一なるものが、今日の如き状態に進化して永久に存在することを得るは、力の致す所なれば、この力こそ最後の實在なれ。之を要するに、

$$A=a+b \quad A-a=0 \quad A-b=0 \quad A=\text{宇宙}$$

この方式の如く、宇宙のAはaの精神とbの物質との渾一に成り、Aよりaを除くも或ひはbを除くも共に滅却の0に歸するを免かれず。而もAはaの大字によりて現はさるゝ如く、aと最も關係深きを知るべし。

人或ひは非難して、吾人の精神は太初より來れりとせば、精神は即ち一種の「エネルギー」なりとするに至り、かくては物理上の「エネルギー」と精神とは大に異なる者あるは、一汎學者の已に認むる所ならずやと曰はん。然り、されども、物質が已に同一の根原より來れりとせば、精神も亦、その力より來れりといふの、不當なる推理に非ざるを知るべく、現代に於ける「エネルギー」と太初のとが同一なりとするの不當なることも知るに足るべく、かくて太初の方が、ある程度に變化せしものが物理的「エネルギー」にして、太初の方が最高程度に變化せしものが即ち人間精神なりとするを否定すること能はざるべし。

かくの如く宇宙の本體根原を觀じ來つて、さて人間自身の方面を省みれば、他の生物と同じく、生死あり、老少あり。されば吾人は如何にしても、この生死老

少の必然的關係を免かるゝこと能はず。されども、人間は他の自然物と異にして、自身の考へによりて、この必然的關係をある程度まで左右することを得べし。これその精神の力なり。

然るに、自然界には物質と勢力との不滅てふ理法あり、これによる時は人間の身體も精神も共に不滅なるを得べきか。これ實に古來人心を悩ませたる處の大疑問なりしなり。予輩はこの疑問に對して、自然界の物質と勢力との不滅なるが如く、人間の物質と精神とも亦不滅なりと斷言するものなり。視よ自然界の勢力は固より不滅なるもその現はるゝ形式を變化す、物質も亦然り、固體は氣體となり液體となり、またもとの固體となる。人間精神も身體と共に一部は之を子孫に分與し、一部は、形式を變じて、言語となり、文章となり、事業となり、生活となり人間社會に存す。かく言はば、人或ひは疑ふ所あらん。されども、その言語の謬となり、隣人の話柄となり、文の竹帛となりて傳はり、事業となり生活となりて存するものは、皆彼れの精神の外にあらはれしものならずや。即ち自然界の「エネルギー」が形式を變じて存在すると更に異なる所な

きなり。從來、この事跡を以て靈魂不滅を説きし者なきに非ざるも、その説明は自然界の「エネルギー」の形式變化の理によること能はざりしは慥かに一つの欠點なりしなり。

この故に、大に精神を活動せるものは、大に之を社會と子孫とに傳へて不滅ならしむ。されば活動は人間處世の一大條件なり。こゝに注意すべきは子孫に分與せる精神は遺傳となりて、その子孫の素質をつくる。その子孫にあらはるゝには早きあり遅きあること身體の方面に異ならず、といふ事これなり。賢人の子に必ず智者なきも、その子孫の何れにか之を見ることを得べし。これによりて、人間は未來あり、従つて未來を思はざる可からざるを知るべし。身體も亦精神と同じく、強健なる身體は強健なる子孫を生じ、病毒ある身體は必ず病毒ある子孫を遺す。視よ酒毒が子孫に影響し、結核、梅毒が如何に子孫に甚しき影響を及ぼすかを。しかし乍ら、身體も精神も、一たび、その形式を變化する時は、之を統一せる「我」の意識なきが故に、個體の我は、そのまゝにて存在すること能はず。一休が「引きよせて結べはしばの庵にて解くればもとの野

結 論 四最後の信仰告白 素人宗教観
 一五
 り。此に於てか、**古往今來の衆智を集めてその指導する所によりて活動し進行するの要あり。**かくして一定の針路と手段とを取ることを得べく、これがやがて一定の傾向にかたまりたるもの即ち信仰なり。されども、**我の精神、我の知見は、何處までも信仰の中心にして、これに衆智をつき混せて渾一の一體にかためたるもの、これやがて我を指導する所の唯一の信仰なり。**この信仰は之を**向上的に仰望する時は神にして、その根原は即ち宇宙成立の大精神従つてその本體は活動なり。**されば**予輩素人が常に崇拜すべきはこの大精神大活動なる神なるなり。**予輩を動かす、**オーソリチー**なるなり。今試みに古來世の學者宗教家、將世俗のものが崇拜せし所を、その本質によりて區別する時は、**神話的神あり、神秘的神あり。**或は**理性的神あり、科學的神あり。**太古の人類が、この世界を創造し、種々の現象を起す本體とせるものは**神秘は固より神秘なるも、これ實に智識蒙昧時代に於ける思想にして、之を神話的神とし、以て後の教義的神秘と區別すべく、人智の漸く進みたるにも關せず、只信仰の一途によりて、人格的神の實在を信ぜしものは、これぞ神秘的神といふ**

べく、一言にしてその本質をいひあらはせば、**西行が、何事のおはしますかは知らねども**
 ありがたさにぞ涙こぼるゝ
 といへるが如き即ちこれなり。多くの宗派の立つる教義の本尊は皆この類に屬す。之に反して**理性的神は哲學者の認むる所にして、眞如實在の如き全然非人格的なるもの、所謂理性の産物なれば、教義的神の如く、甚しき熱情の纏綿するものに非ず。**釋尊が**「オーソリチー」とせる所のもの、如き亦これに近きが如し。**科學的神とは、**宇宙現象の裡に行はるゝ所の理法にして、或ひは、之を美の一面より觀するものあり。**或ひは**智の方面より觀するあり。**將た善の一面より觀するあり。孔孟の**天といひ、命といひ**しものも、**證じ來れば、この理法に外ならず。**
 予輩がいふ所の神はこれらの一部にあらずして**理性的科學的の分子の外、更に一つの分子を加へたるものなり。**その**一分子とは即ち衆智これなり。**この思想は古來多くは**恩**といへる語によりて表はされ來れる所なり。即ち吾

人をして、今日の如き身體あらしめ、今日の如き精神あらしめ、現時の如き生活をなさしむるに至れる祖先社會の恩恵にして、

箸とらば天地御代のまほんめぐみ

主人や父母の御恩あじはへ

この道歌の示す所も、もとより恩にして、又大乗本性心地觀經に、佛言、世間恩有、四種、一父母恩、二衆生恩、三國王恩、四三寶恩、如是四恩一切衆生平等負荷云々と、いひ、儒教にては、天地、父母、主君、聖人の恩をあげしによるも、古くより衆智の貴ぶべきを認めしを知るべし。

さりながら、唯、漠然として、これが基礎となるべきものなくば、あまりに、抽象的に失して、實際吾人が生活する上に、向上の力を與へ、慰安の助けとなり、活動の元動力となること尠なかるべし。これをたとふれば、彼の人とか、犬とか、机とかいふ概念、一個一個の個體より異なるところを去り、同じ點を抽象してつくりあげたる概念にても、さて、人とか、犬とかいふことを思ひ出すときには、何處かにて、かつて見たる人、犬、机、特別なる一個のものが、直ちに思ひ浮かばれて、

やがて、その概念が、明瞭になるが如し。此に於てか、予輩が神と名づくるものも、亦これを代表すべき實體を闊々裡に、認め置くは、最も都合のよき事なるべし。之を既成の宗教に見るも、耶蘇教は、その神をキリストによりて代表せしめ、佛教は、その佛陀を釋尊によりて代表せしめしが如く、何れも、その宗祖と呼ぶる、人物を以て、その宗教的客體の代表とせざるはなし。予輩は、先づ古來世界に於いて、あらゆる人物にして、崇拜の對象となれるところの偉人を撰びて、その善きところを抽き取り、之を打つて、一丸となし、かくして、之を以て、理想的神の本體を代表せしむるの必要なるを信ずるなり。然らば、その偉人とは、誰なるべきか、而も、一人にして完全なりと思はるゝ人物を見出さん事は、容易ならざるを以て、予は、これら衆智を綜合せるものを代表せしむるに、天といへる語を以てするは、最も適切なるを信ずるなり。そも、天とは、之を有形のものとするれば、高くして渾圓なることを意味し、高天、上天といひ、蒼穹といひ、大空といひ、之を無形のものとして、解するときは、人生、自然の條理を意味し、神といひ、上帝といひ、理といひ、將天道といひ、天命といふ。古より、人間が、自己より

高尚なるもの、完全なるもの、至樂なるものを形容するには、多くは、この天を以てす。孔子が常に天をいひしは更なり。我が國の高天原、印度の梵天、西洋の天國、天堂の如き皆これ天をいはざるはなし。天なるかな天なるかな。天は實に、人間の最高理想を代表すべきもの、衆智を代表すべきもの、人生、自然の條理の淵源たるべきもの、之を以て、予輩の理想的神の代表語となす。實に當れるを信ずるなり。

易の上象に曰く、大なる哉乾元、萬物資りて始むと、孔子は曰はずや、死生命あり。富貴は天に在りと。西語にいへり、天は自ら助くる者を助くと。これ皆予輩がいふところの宇宙の大精神——社會心にして、衆智の極智、自然の妙理、人生の條理を指せるにあらずや。

實に吾人の境涯を願れば、この身は父母の遺體なり。而もその父母たるもの由りて來る所をたどれば、その淵源や實に悠遠にして、その間に受けし種々の影響によりて、現在の狀態に進化せることは進化論等の教ふる所なり。獨り身體のみならず、吾人が現在有する所の精神作用も亦かくの如くにして

遠き祖先より、さては社會の溶鑄によりて受けし賜にして、證じ來れば、五十年の境涯に於いて自ら造り出せるものは幾、何もなく、それすら社會の刺戟によるを思へば、ある人がいへりし如く、何某著作と銘打つて世に出すべき智識は全く無き理なり。

こゝに於いてか知るべし。予が所謂宗教は時代と適應し、智と信と矛盾せず、自力にしてまた他力なることを。而も理性のみに非ずして、血もあり涙あり、その客體たる本尊は神なると共に人、高きと共に低く、相對なると共に絶體、世間の中に住して活動の元氣を與へ、向上せしむることを得べく、慰安を與ふることを得べし。之を仰げばいよ／＼高く、之に接すれば方寸の中にあり。

人もし、この世を渡る案内を求めんとせば、これを措いて豈他にあらんや。爾もし之によりて解脱せんと欲せば、世間の中に住して活動し、我は孤存の我に非ず、社會は皆これ我なりと觀じ、即ち自我を滅却するに非ずして、この自我を擴張して、一視同仁の境に到らんことをつとむべし。神は爾を導きて、安樂圓滿なる彼岸に到達せしむべきこと、少しも疑ひあるべからず。

予はなほ最後に予が常に自らを慰め世に接する心術の一斑を述べて素人宗教の實踐的方面に關する工夫を明らかにすべし。

蓋し人間が此世に在りて活動するには元氣が第一なり。人間の活動が機械の運轉なりとすれば元氣はその機械を運轉せしむる石炭なり。而してこの元氣を養ふには常に心の中に楽しいといふ感を失はざるにあり。この楽しいといふ感は如何にせば得らるゝかといへば心を廣く大きくゆたかにして、如何なる事に出あひても腹を立てず、怒まらずして、あきらむるに在り。この事極めて易きやうなれども、實は余程の修養を積まざれば能はざるなり。こゝに於いてか、一つの心術といふことが大切となり、工夫といふことが必要になるなり。世の中の事は、とかく我が思ふやうにのみゆかぬが常。ある時は、非常に不平を起さしむるやうの事情に遭遇することあり。又ある時には、身の措き處なき程悲しき時あり。苦しき時もあり。かゝる時に當りて常に心の平和を保ち元氣を失はざるやうにする予が工夫は第一に、困難に出あひし時は、すべての艱難は、天が我を上達せしむる試金石なりとの感を起し、艱難と力

くらべをする心持になりて、決して屈することなきをつとむるに在り。これには、予はいつも孟子の、天の將に大任を是人に降さんとするや、必ず先づ其の心志を苦しめ、其の筋骨を勞し、其の體膚を饑やし、其の身を空乏にし、行ひ、その爲す所に拂亂す。心を動かし、性を忍んで、その能はざる所を曾益する所以なりといふ章を思ひ浮かべ、さて、古來大業を成し遂げし偉人の跡をたどることをつとむ。

もし又悲しみに遭遇する時は、比較といふことによりて慰安を求むるを常とす。我が一身を失ふに比すれば、こればかりの事は、あきらめざる可からずとして、元氣を失はざらんことをつとむ。

更に他人より我れを侮らるゝ事ある時は、た、我れを苦しめらるゝ時は、その相手が我れより先達ならば、これ未だ自個の心田を開拓し、修養する事の足らざるがためなり。我れ人に侮られざらんことを欲せば、宜しく更に自個の修養を積むべし。人に苦しめられざらんと欲せば、宜しく更に自個の勢力を大にして、然る後に、彼れをして自ら、我れの價値を認めしむべしとあきらむること

結論 四最後の信仰告白 所謂素人宗教観

我れに非理を以てあたる者あらば、先づ我れと彼れとを比較し、彼れは我れよりも下位の人物なりとして、却りて之を憐み、更に自個と彼れとの地位を轉じて、彼れの非理を以て、我れにあたる心情を付度し、かくして愛といふ情によりて、これを恕するを常とす、いはゆる忠恕なり。

思へ人。苦樂は世の中に實在するものに非ず、皆我が心からなり。笑ふ門に福來る。常に楽しいといふ感を抱きて、すべての事物に接する時は、活動の元氣旺盛して、この世は黄金世界となり、安樂の境土と化すべし。心をば海の如く廣大にして、愛といへる浪をたへ、山の如く高き思想を抱きて、齷齪せず。果してよくかくの如くなるを得ば、素人宗教の目的は、こゝに始めて達せられ、その偉大なる人格は、無量劫に光明を宇内に輝かすを得べし。

附 録

死は箇人の終極なり。されどこの

中には一新人の萌芽ありて藏す。

(シロツペンハウエル)

靈魂の不滅

文學士 北村 教 殿

此世の生命の終はると共に、吾人の魂は無くなるものなるか、若しくは死後迄も魂は繼續するものであるかと云ふことは古來の大問題である。是迄の習慣にては宗教信者は靈魂不滅説を奉じ、無宗教者は靈魂滅亡説に傾きて居る。若し靈魂が此世限りて無くなるものとせば、未來とか、地獄とか、極樂とか、又神とか、佛とか云ふことは、全く無學な者の迷信となりて仕まふ。故に宗教信者は飽迄も靈魂不滅説を奉じて居る。

而るに無宗教家の立場より論ずる時は、人間の精神と云ふものは、肉體を離れて別に存在して居るものではない、腦髓や神経の活動其ものが即ち精神である。靈魂と云ふが如き無形の物が、體内の何れかに宿りて、其れから精神作用の起り來ると云ふが如きことは、決して有り得べき筈はない。是を以て肉體を焼いて灰になさば、精神も同時に無くなるもので、恰かも油の盡きて燈火の無く

成ると同様であると云ふ、斯かる説は最も普通に唱へらるゝ所である。乃て靈魂が滅であるか、不滅であるかと云ふことを論ずる先決問題として、靈魂なるものが有るか無きかと云ふことを極めねばならぬ。

佛教に於ては三世因果と云ふことが最上の眞理と成りて居れども、靈魂と云ふ様な固まりたるものが一つありて、過去より現在、現在より未來へ轉輾してころがり行くものだと謂はぬ、門外の人の多くは、佛教の三世因果とか、因果縁業感と云ふことを誤解して居る様である。三世因果と云ふことに伴ふて、刹那生滅と云ふことが大切である、佛教に隨へば、獨り吾人の精神のみならず、天地萬有は總じて瞬間毎に生滅して居るのである、前の瞬間に滅する途端に後の瞬間に生ずるのである、生じては滅し、滅しては生じ、瞬間毎に生滅しつゝ、繼續して行くのは、一切の物質皆な一樣である、夫れは物質が前の瞬間に滅する途端に其の習氣(潛勢力)を後に殘して、其習氣によりて後の瞬間の物質が生ずるものである、此の生滅の間際は頗る微細なるものなれば、吾人は之れを識別することが出來ぬ故に、恰かも物質が恒存して居る様に見ゆるなり、物質すら既

に斯の如きものなれば、吾人の精神は勿論生滅しつゝ、繼續し行くに相違ない。其の生滅しつゝ、繼續し行く具合は、恰かも珠數玉を繋いだ様な者である。

吾人の精神作用は、一生を通じて流れをなして居る、壽命が短かければ、精神の流れが短かい、壽命が長ければ、精神の流れも亦た隨て長い、此の流れを中途にて切斷して其の切口を觀ると假想せよ、此の切口の表面には種々なる觀念あり、例へば「甲」「乙」「丙」「丁」等の如し、此等の數多の觀念の中に於て、最も力の強き觀念が中心となりて、殘りの觀念は其の周圍に存在して居る、第一の瞬間に「甲」が最も有力なる時は、「乙」「丙」「丁」等は此れに隨伴して居る、然るに「甲」のみが何時までも獨りて勢力を占めて居る譯には行かぬ、自然に「甲」の力が衰へて乙の強くなり來ることあり、此に於て第二の瞬間には、「乙」の力が最も強くなりて、第二の瞬間に於ける精神の中心となり、他の觀念は隨伴と成る、此れと同様に、第三の瞬間には、「丙」が中心となり、第四の瞬間には、「丁」が中心となる。

斯の如く各瞬間に於ける最も有力なる觀念が中心と成りて精神を支配しつゝ、一條の流れを成して居るのが人間の意識である、是れは恰かも昔しの時代

の革命の様なもの、先づ織田信長が最も有力なりしを以て天下を統一し、織田氏亡びて豊臣氏起り、豊臣氏亡びて徳川氏起ると云ふ様なものである。吾人の意識作用は瞬間毎に交替はすれども、前後関係がないと云ふのではない、第一の瞬間の状態が原因となりて第二の瞬間の状態を呼び起こし、第二の瞬間の状態が原因となりて第三の状態を呼び起し、次で第四第五皆な斯の如くである。新陳代謝しながら前後因果の関係を以て聯續して行くのである。佛教に於ける刹那生滅とか、三世因果とか申すことは斯の如き意味のことである。此の精神状態其物を指して靈魂と云ふのでありて、此以外に靈魂と云ふべき餘計なものはないのである。

斯に至りて一の難問が生じ來るのである。——此の世一生丈の間は以上の説明にて充分なれども、吾人が死した後までも斯様な状態が繼續すると云ふことは實に受け取り難しと、——是れは實に尤もな疑問であるが、然かし予輩は之を信ずる丈の充分なる理由を持ちて居る。前に申した通り、人間の靈魂は珠數玉を絡らねた様なものであるから、一一の玉と玉との間には密着なる關係

があるのである。第一の玉の動く方は獨り第二の玉に影響を及ぼすのみならず、一生を透して無數の玉に對して、間接若しくは直接に影響するものである。第二第三乃至第五十第百等も皆な同様である。去れば後の玉になれば成る程、前の玉の影響を受くる數が多くなる。而して最後の玉は何れであるかと云ふと、愈々死して仕舞ふと云ふ最後の刹那である。此の最後の刹那の玉は、過去五十年間乃至八十年間に於ける無限の玉の影響が悉皆集注して居るのである。斯の如く複雑なる影響の籠れる最後の玉の運動は、何物に向て其影響を及ぼすべきか、——是れ頗る重要な問題である。

勢力不滅と云ふことは物理学上に於ける宇宙の原則である。而るに世の中に何の勢力が微妙だと云ふに、人間の精神程微妙なるものはない。電氣や光線や音響の如きものも、到底精神作用の微妙にして而かも迅速なるには及ばない。比較的劣りたる電氣等の勢力すら不滅なりとせば、其れ以上の精神作用は勿論不滅でなくてはならぬ。然り而して臨終の最後の刹那の玉は、過去數十年間の無限の勢力を籠めつゝ、更に次の物に向て影響せねばならぬ。——換言す

れば最後の意識状態の終りを告ぐると同時に、次の意識状態が起らねばならぬ、是れ即ち後生である、今生の最後の意識状態が滅する途端に、後生の最初の意識状態が始まるのである、後生を惹起すべき直接の原因は、今生の最後の意識状態に原因するのである、今生の最後の意識状態は、今生の總ての意識を悉皆原因となして起りた結果である、今生に於て第一の玉と第二の玉とが直ちに接続すると同様に、今生の最後の玉と、後生の最初の玉とが相ひ接続するのである。果たして然らば後生の意識状態は如何なるものかと問はゞ、是れは吾人の未だ實驗せぬこと故に、何とも申し様がない、兎も角も、今生の終りと後生の初めとは、間髪を容れざること、丈は疑ふことは出来ぬ、靈魂不滅に對する予輩の信仰は右の通りである。

靈魂不滅説に就て北村君に質す

石橋 臥波

靈魂の有無本質滅不滅といふことは古來學者宗教家が困難なる問題として

居るものゝ一つで、今日にても尙諸説紛々容易に解決を見ることの出来ないのであるが、頃る北村教嚴君の靈魂不滅論が出たので、それを讀んで見ると、全然佛教にいふ處の説であるといふことは、文中に、佛教に従へばと書いてあるによるも明白であるが、しかし、予輩は之を信するだけの理由を持つて居るといふ様な點から見ると、それが即ち北村君自身の説になつて居る、即ち氏それ自身の信仰であると思はれる、それは何れにしても予輩の立場から見ても疑ひの存する所があるので、次にその要點を擧げて君の説明を煩はしたのである。

第一君の説によれば、靈魂とは吾人の一生を通じて生滅しつゝ、新陳代謝しながら、因果の關係を以て聯續して流れをなして居る精神状態そのものであるとして居ると思はれるが、果して然りとすれば、刹那生滅を根本義として、物界心界皆流轉して暫くも止まらずといふ立場から説明したものとせなければならぬ、この萬法流轉といふことは、ヘラクライトスも嘗て唱へた説で、現代の心理學者も亦吾人の意識は常に轉移しつゝあるとして、意識の流れといふ名

をつけて居る位であるから、強ち否定するのでは無いが、こゝに一つ説明を求めねばならぬは、常に因果の連鎖によつて流れをなして居る精神状態といふのは、吾人が現に自覺して居る所謂醒覺して居る精神状態即ち意識のことであるか、換言すれば現象としての精神作用をいふのであるか、第一にこれが説明を求めねばならぬ。

その次に人間の靈魂は球數玉を絡ねた様なもので、各瞬間に於ける最も有力な觀念が中心となつて、精神を支配しつゝ、一條の流れを成し、後の玉になればなる程前の玉の影響を受くることが多くなつて、愈々死して仕舞ふと云ふ最後の刹那の玉には、過去の無限の玉の影響が悉皆集注して居るといふが、人間の精神は果して球數玉を絡いだ如きものであるか、所謂生と滅との關係は、第一瞬間の状態と第二瞬間に於る状態とは因果の關係によつて同一状態でない、必ず幾分かの變化を受けて居るといふ意義であるか、思ふに必ず生滅時を同じうして前後あることなし、即ち前の瞬間に滅する途端に、その習氣潛勢力を残して後の精神状態を生じ、この生滅の間際には頗る微妙にして吾人自ら

知ることが出来ぬと答へるであらうが、こゝに疑ひが存するのである、線は點の集合である、三世は刹那の連続であるとは人がよくいふことであるが、かゝる論據であるか、又その生と滅との間を連續するものは潛勢力であるとは現代自然化學者のいふ「エネルギー」であるか。

第三に勢力不滅といふことが宇宙の原則であるに、物質よりも何物よりも微妙なる人間の精神が、今生の最後の意識状態がそのまゝ滅すといふことはないとして、靈魂の不滅を信仰せねばならぬとの結論であるが、之によつて見ると、君の靈魂は勢力即ち「エネルギー」説で、嘗て井上博士(圓了)の靈魂不滅説と同一のものと思はれる、果してそれならば予は君の此結論には反對せねばならぬと信ずるのである、如何となれば精神作用を以て物質的「エネルギー」不滅と同一の論法によつて、何に移り行くかは知らぬとしても、滅失してしまふものと信ずることが出来ないといふのは、實に薄弱な論據といはねばならぬ、佛教の業に於ける説は如何にもあれ、君の所説による時は、現象的意識が即ち靈魂であるとより外は見えない、それならば決して肉體の死後にも不滅であると

いふことは出来ない、又靈魂を勢力即ち「エネルギー」とするならば、「エネルギー」には變化はあるも、發達進化といふことも無く、人間心意の進化發達を説明することが出来ざるのみならず、物理的の「エネルギー」とは異にして、精神作用は死に近づくに従つて次第に衰へて來て、生涯の勢力を集合蓄積することは不可能である、故にこの意味に於ける靈魂不滅は信ずることが出来ないといふはねばならぬ。

かくいへば、予の説は全然靈魂滅失であるかの如くならんも、予はある意味に於ては決して滅失するとはいはないのである、幸ひに以上述べた點について高説を聽くことを得たなら、更に所信を明かにして教を乞ふつもりである。

靈魂不滅説に就て石橋君の質疑に答ふ

文學士 北村 教 殿

予輩は曩きに靈魂不滅説に就て聊か鄙見を陳べ置きたるが、忽ち石橋臥波君の質問を受けることゝ成つた、予輩は不幸にして未だ貴下の温容に接せずと

雖とも更に貴下の質問に答ふべき義務あることを自覺すると同時に、現今多くは實利主義にのみ傾く世の中なるに、貴下の如き精神問題に就て眞摯なる研究者の在ることを深く喜ぶものである。

第一問 靈魂とは現象としての意識作用を云ふのであるか。此の質問に對しては予輩は然りと斷言するのである、靈魂なるものは哲學にて謂ふ所の本體にもあらず、實在にもあらず、又た佛教にて謂ふ所の眞如にもあらず、法性にもあらず、因果の連鎖によりて流れを成して居る精神的現象其ものである、是は予輩の意見としてのみ斷言するにあらずして、佛教の靈魂説は即ち是れなりと解釋するに躊躇せぬのである、殊に俱舍論の刹那生滅説は、ヘラクライトスの萬物流轉説と同様にて、決して靈魂と云ふ一種の我の實在せることを主張するものにあらず、況して大乘佛教に於てをや、若し靈魂にして實在とか眞如とか云ふが如きものなりとせば、其の滅と不滅とは最初から議論とはならぬのである、故に是は現象に相違ない現象に相違なしとすれば、必ず因果の連鎖によりて流れをなすものに相違ない、此の點丈けにては佛教の所説と現今

の心理学の所説と異なる所はないが、唯だ異なる所は、佛教に於ては因果の連鎖は未来迄も繼續すると云ふに反して、科學者は今世の肉體組織の崩解すると同時に斯かる連鎖は斷絶すべしと云ふのである。

第二問 人間の靈魂は珠數玉を連らねた様なもので、其の玉と玉とを聯續せしむるのは、エネルギーであるか、既に靈魂は生滅轉化止むことなき現象なりとせば、前の瞬間と後の瞬間と相ひ繋ぎ合ふ状態を珠數玉に喩へたらば最も解り易すからうと思ふ、前の瞬間には特殊の觀念が中心となりて他の觀念は之に隨伴し、次の瞬間には此の觀念を壓抑して他の觀念之に代り、次第々々に生滅轉化し行く状態を形式に顯はしたならば、珠數玉の様になるであらう、かゝる前後の状態が相ひ聯續するに就ては、必ずや其の間に一種の潜勢力がなくてはならぬ、何等の潜勢力なくして、全く異なりたるものが聯續し得べき筈がない、恰かも糸心がなくては珠數玉が聯續せざると同様であると思ふ。然るに、此の潜勢力を以て自然科学者の所謂「エネルギー」と同様に見做すことは予輩の取らざる所て、寧ろ反對するものである、運動が變じて熱となると謂

ふが如き機械的説明を以て、かかる微妙なる問題が解決の出来るものではない、此處が予輩が科學者にあらずして、宗教信者たる所以なりと自覺して居るのである、予輩はかゝる潜勢力は佛教に所謂業種若しくは習氣と云ふが如きものなりと信じて居る、此の業種とか習氣とか云ふものは、即ち精神的現象界に行はるゝ所の事實である、然れども生滅轉化しつゝある精神的現象と異なりたるもの(即ち習氣が各瞬間に於ける意識中に在りと云ふには非ずして、精神的現象、其の物の力を名けて習氣と云ふのである、去れば此の習氣を以て物質的現象界に比較を求むる時は「エネルギー」と云ふが如きものに相當すべしと云ふこと迄は斷言し得れども、「エネルギー」と同一なりと云ふことは到底斷言出来ぬのである。

由來或る極端なる哲學者の如くに、一切世界を精神的事實にのみ歸せしめんと擬することの越權なると同じく、精神的事實を悉く物理的に解釋せんと欲する科學者の意見には賛成することが出来ぬ、其故は物質界の事實も、精神界の事實も等しく是れ現象なり、而して物質界の事實のみにては、其の靈妙不思議

議なること人智の測量すべからざるものあるが、其れよりも更に靈妙を極むるものは人間の精神である。此の精神を物質界に於ける「エネルギー」にて説明せんと擬することは餘りに大膽に過ぐるごとく思ふ。予輩は如何しても習氣と云ふが如き精神の力を假想せざれば精神問題は解決の出来ぬものと信ずるのである。

然からは吾人の精神は如何にして習氣と云へる潜勢力を包蔵するに至りしか。又何故に此の力は永遠不滅のものなりや。此問題は純正哲學に歸せねばならぬ。凡そ物にせよ、心にせよ、宇宙の一切諸現象は悉く宇宙の實在の活動である。實在其の物の活動する所は即ち心とも成り物とも成る。恰かも水が千波萬浪を起して横波縦波相互に影響しつゝ活躍せるが如きものなるべし。されば心の活動とは即ち實在の本來固有の活動にして、實在の永遠不滅なるが如くに心の活動力も亦た不滅である。其の心の活動の顯在的なるは各瞬間に於ける意識状態にして、其の潜在的なるものは即ち潜勢力である。是れ即ち習氣である。顯在的とは、吾人の自覺に上ると云ふ謂にして、潜在的とは吾人の自覺

に上らぬと云ふ謂である。予輩は科學者の機械的説明を以ては宇宙の秘奧は到底捕捉出来ぬと想ふ。

第三問 勢力不滅説に據りて靈魂不滅説を論ぜんと欲するか。此の質問の解答は第二問の解答中に既に盡きて居る。靈魂は勿論「エネルギー」と同一ではない。又た現象的意識以外に別に靈魂と云ふが如き我の在ると云ふ説は寧ろ佛教の大に忌む所となりて居るので、斯かる我執を打破せんがために佛教は發達せしものと見ても宜しい。かゝる現象的意識は、單に現象としてのみ看取する時は、心理學で云ふ意識と佛教家の云ふ靈魂と殆ど一ではあるが、此の現象たるや心理學者の云ふが如き單一なる現象にはあらずして、宇宙の實在假りに眞如と名づくの活動其のものが、即ち吾人の現象的意識であると云ふことは佛教の哲學的なる所以を示めせるものにして、予輩の靈魂不滅の信仰は即ち此の基礎の上に築かれて在るのである。是を以て實在と云ふ觀念を離れざる現象的意識ならでは不滅と云ふことは論ぜられぬ。實在を離れざる現象が因果の關係を以て相ひ聯續して居るのである。去れば予輩の靈魂とは現象

的意識に過ぎざれども、其の一面には實在と云ふ觀念が伴ふて居るのである。前號には此處まで論ずることが出来なかつた、貴問に答ふる所、大略以上の如くである。終りに臨て更に一言致し度きことは、世の學者或は兒孫の繁榮を以て靈魂不滅と解するものあり、或は後世に遺したる事業及び精神的感化と云ふことを以て靈魂不滅を唱ふるものもある。斯の如き説は一寸聞た所では珍奇は珍奇なりと雖ども、後より熟察すれば、忽ち厭氣を催し來りて、到底吾人の深奥なる宗教的情操を満足せしむることは出来ぬものである。吾人の宗教的情操を満足せしむるものは、如何しても吾人の意識に繼續がなくてはならぬ。以上の靈魂不滅説は、予輩の意見とは申しながら、別に創見でも何でもない、唯佛敎の敎理を現今の術語を假用して、新らしく解釋を加へたる迄のことである。勿論片言隻語を捕へて觀れば、予輩の附け加もあるかも知らねども、其位の事は仕方がない、現今の學術を利用して、古き敎理を解釋することは誠に面白いことである。是に付て解釋者の見識の加はりて行くことは當然だと思ふ。但し靈魂不滅とは、現象的意識の來世に於ける繼續を意味すると、文は決して

動かないのである。佛敎の敎理に於て、彼の十二因緣説(Nidanas)は確かに此れを示して居る。予輩は斯かる意味にて靈魂不滅なることを信じて居るもので、同時に予輩の意見と成りて居る、尙ほ高敎を仰ぎ度いのである。

靈魂不滅説に就て再び北村君に問ふ

石橋 臥波

予は曩に北村君の靈魂不滅論に就て一二の疑團を記して説明を求めたりしに、最も精密なる説明を與へられ、君の論旨と信仰とが明かになれるのみならず、之によりて益を得ること多きは深く謝する所なり、されども尙疑ひの存するものあるにつき再び高敎を煩はさんとす。

第一、靈魂とは現象としての意識作用にして、因果の連鎖によりて流れを成し居る精神的現象其ものなり、唯だ佛敎にては因果の連鎖は未來迄も繼續すとなし、科學者は肉體組織の崩解と共に斷絶すとなす。今暫く君の靈魂に於ける所信の概要を言ひあらはしたるものとして之を佛説に比較するに、靈魂

といひ我といふものは前後連続して生滅する意識現象にして實體にあらず、即ち過程なり、故に常住の我なく、昨の我は今の我にあらずとして無常無我の根本義を立し、而もこの生滅の間に因果の連絡を認め之を根本原理として、宇宙萬有を説明するに更に道德的意義を有する所の輪廻説を以てし、こゝに於てか靈魂は刹那々に流れ去つて我なるものなきも、人の動作のみは永く其の果を連続し、因となり果となり、生滅輪廻の本體をなすが故に、道德上に於ける個人の意義を認むることを得、而して人の動作活動は一面より見る時は輪廻生滅の本體にして、生滅に超越し輪廻を貫く道德的連鎖なりと云ふべし、これ佛説の大意にして、君の所謂現象的意識作用そのものとしての靈魂は、佛敎に於ては未來までも繼續するとなすものとは異なる所あるが如し、知らず君の所謂佛説とは何れの時代に於けるものなるか、如何にしても現象的意識は個體の崩解と共に消滅せずして未來にまで繼續すべしとは予は信ずること能はざるのみならず、この點に於て心理學説と佛説とは一致せるものと斷言することを得んか。

第二 靈魂を現象的意識と斷じながら、生滅の間を連續する一種の潜勢力即ち力を持ち來りて、この力は佛敎に所謂業種若くは習氣の如きものとし、之を假想せざる可らずとなし、未來に繼續して不滅なるものはこの力にして、實在の潜在的活動力なりとせるは矛盾といはざる可らず、何となれば靈魂にして實在とか眞如とかいふが如きものならば、滅不滅は問題となるべきものにあらずとして、殊更に現象的意識作用を以て靈魂なりとしながら、其不滅にして未來にまで連續するものは、顯在的意識にはあらずして實在の潜在的と見るべきものとしたればなり、思ふに君の初めに於ける靈魂てふ意義は現象的にして、後の不滅てふ意義の靈魂は實在的なるより、かゝる矛盾を來せるならんも、この邊は更に説明を煩はさざるを得ず、且つ靈魂の不滅を純正哲學上より説明せざれば不可能なりとせば、君の實在論據の如何なるものなるかは聞かまほしきのみならず、本問題の説明には最も重要なることなるべし。

第三 實在てふ觀念を離れざる現象的意識ならては不滅といふ可らず、但し靈魂不滅とは現象的意識の來世に繼續することは、佛敎の敎理に於て決して

動かずといへる君の論旨には一致せざる所はなきか、現象的意識は現象的にして、之が實在てふ觀念を伴ふと否とによりて、滅不滅の別あるべきものにあらず、故に心理學者が現象として論究する意識とても、決して佛教にいふ所の現象としての心と差別あるべきにあらず、即ち何れも一步を進めて體を認めざるにはあらず、心理學は之を純正哲學に譲りて説明の材料を給するものにして、由來哲學といへば科學を繼子視せし僻見は、今日は已に消えて最も相近づき、思辨てふ界裡に深く高く隠れし哲學は、經驗の上に立つ自然科学の材料の上に座し、その進行の徑路は直線に歸せんとし、従つて物質と精神、主觀と客觀との限界も從來の如くならずして、ゼーミュスは精神活動は腦髓活動の函數なりとし、ヴントはすべての經驗は主觀客觀の共働產物にして、精神てふものは確實なる實際の存在物にあらずして、抽象的概念に過ぎずとなし、其他ラツツエン、ホーフエル、フイエーの如きも亦哲學上活動的一元論、而も事實的原理を唱ふるが如き、以てその傾向を見るべきなり。

且、それ現象的意識の來世に繼續することは佛教の教理なりといふ君の所謂

佛教は何れをいへるものなるか、前にもいへる如く、輪廻の主體は羯磨カマ即ち業にして、靈魂は決して本體にあらず、過程プロセスなるが故に未來のあるべき理なし。予輩の信ずる所によれば、佛教に於て不滅を説くは阿頼耶緣起業感緣起の方面にして、現象的意識の靈魂に就ては不滅を説かざること、現代心理學說と一致し、最も適切なるものとなすに、君は他迄體と用とを混同せるが如し、故に初めの現象的意識を靈魂なりとせば、宜しく不滅説を捨てざる可らず、後の實在的方面よりせんとせば、現象的意識との別を明かにせざる可らず。

第四、君の論旨を推すに、靈魂とは實在活動的の顯現にして、その潜在的の習氣クセ(精神的現象其物の力)によつて未來に連續するものにして、その習氣は物質的、エネルギーに相當するも同一にあらずとなすにあるが如し、果して然るか、オットワルドは嘗て精神勢力説を唱へ、フイエーは心即力(Ideal force)説を立てしが、思ふにこれらの説と同一なるべきか、精神勢力てふ説はシユルチエー氏も亦比較心理學に於て説明して、精神を一の力と見る時は、死てふことは他の新しき形に變化すといふまでのことなりと曰ひ、ヘルチユナン氏も亦意識に

上らざる精神作用ありて之が後の世に傳はるものなれば、人はこれに依て精神が不死なりといふことを得べしといへり、君もし佛説を解釋するに更にかかる説を以て補ひなば、その信仰は最も予輩をして満足せしむるものたるを得んか。

第五 以上記する所は、尙君の説明に疑ひの存する要點なるが、尙こゝに問はんとする所は十二因縁説と世の學者の兒孫の繁榮感化を以て靈魂不滅とすといへる事なり、君の説によれば現象的意識の繼續を十二因縁に如何に配して説かんとするか、現在の識は五蘊と共に生滅するには非るか、一休禪師の「引きよせて結べば柴の庵にて、解くればもとの野原なりけり」といへる句は如何に解釋するか、且世の學者にして兒孫の繁榮を以て靈魂の不滅を唱へしものあるは未だ予の聞かざる所、且つ精神的感化を以て靈魂不滅となし、を耳にせず、これ或は未來の有無を言ひしならん、之を要するに君の創見に屬する所あるが如し、如何にもあれ、かゝる人生の重大なる疑問は只佛説にのみ拘泥すべきにあらず、信仰は人間の生活に缺く可らざるものなるも、さらばとて思辨

的獨斷的なる可らず、現代の智識によりて説明し得らるゝ限りは之を自然科學に聞き、然る後に宇宙の全體より考察して、健全なる信仰を得んことを要求するは、現代一般の傾向なれば、君幸に示教の勞を吝むなかれ、予も亦疑義のある所は高教を仰ぐことを怠らざるべし。

靈 魂 説 に 就 きて 再 た び 石 橋 君 の 質 義 に 答 ぶ

文 學 士 北 村 教 嚴

靈魂不滅論に關し、小生所信の梗概を披瀝して本紙に記載せしが、石橋君より度々懇篤なる質義を蒙れり、而るに此れは古來哲學宗教の最も重大なる問題にして、未だ満足なる解釋を與へしもの、なきは頗る遺憾なり、然れども科學者の嚴格なる批評を受くるにも關はらず、尙此説を信ずるもの、世間に多きは明なる事實にして、予輩も亦た宗教家の一人として、靈魂不滅及び佛陀の存在と云ふが如き概念を、到底腦裡より除却すること能はず、是れ或は先入主となりて浸潤久しきの結果なるやも識らざれども、最早予輩が一切の思想一切

の行動が、此等の信仰によりて支配せらるゝ迄に成り居れり、世の學者或は之を以て獨斷的迷信なりと批評すべしと雖ども、兎に角斯かる信仰の予輩が腦裡に樹立せし以上は、説明の出來得る程度迄は、あらゆる手段を盡して説明したしと思へり、是を以て説明の巧拙によりて敢て予輩の信仰に増減する所なきことを、豫め貴下の念頭に置かれんことを切望して已まざるなり。

曇きに掲げられたる貴間は堂々たる長篇なるが、就中第四項に至りて——君の論旨を推すに靈滅とは實在活動の顯現にして、その潜在的の習氣(精神的現象其物の力)によりて未來に連續するものにして、その習氣は物質的(エネルギー)に相當するも同一にあらずとなすにあるが如し、果して然るか——との御質義は最も能く鄙見の所存を領解せられたるものと謂ふべし、要するに小生現今の信仰は此れに過ぎざるなり、尙序に、オットワルド等の説を列擧せられたれども、小生疎懶にして未だ諸氏の著書を披讀せしことなし、去りながら西洋の科學者にして斯かる説を主張することは珍とすべしとするも、東洋に於て古來論じ來りし所に比較して、如何程拙てし所あるか、予輩未だ識ること能

はず、唯だ用語の新奇なると、説明の形式の稍整頓せる位のこととは之れあるべし、但し他日是非共此等の諸書を涉獵したしと思へり。

佛教の靈魂不滅説とは稱するものゝ、原始的佛教は識るに由なし、貴下の熟知せらるゝ如く、此の説の最も明瞭にせられたるは世親の時代なりとす、最も馬鳴以前、即ち佛滅後四五百年の間に、小乗佛教は數多に分岐せしが、其間にも夙に靈魂不滅説の存在せしことを認むるに難からざるなり、兎に角業種の作用によりて十二因縁の循環すと謂へる唯識論俱舍論の説を以て、佛教の靈魂不滅説を代表せしむるも差支なしと予輩は確信せり。

又た予輩が既に辨ぜしが如く、靈魂として執着すべき常住の我なるものゝ存在し居るべき等はなし、唯だ生じては滅し滅しては生じ、生滅轉轉して休息せざる所の意識作用を以て、便宜上靈魂とは名くるなり、去れば是れ現象に相違なし、決して是れ實在本體にはあらず、此の如き現象が單に今生に於てのみ斷續するにはあらずして、死後に於ても必ず何等かの形式に變じて斷續すべしと思へり、予輩の信仰は即ち此の一事なり、但し斯の如き精神の斷續状態が死

後迄も連續すと云へばとて直ちに之れを實在なりと謂ふことを得ず、實在とは不生不滅の實體を指す概念なり、精神作用が吾人が千死萬死の後ち、千度萬度形式を變じて生滅作用を營むにもせよ、既に生滅を免かれざるものとすれば、即ち現象と謂つべきなり、現象とさへ謂へば、一世にて終るべき假體のみに限ると定むるは科學者の淺見にはあらざるか、たとひ千死萬死の後ちまでも繼續すとすも、刹那生滅を免かれざる限りは即ち現象に外ならざるなり、右の如き意義にて現象と云ふ概念を使用する以上は、現象としての意識作用は未來迄も繼續すと謂へばとて、決して撞着することなしと思ふなり。

勿論現在の吾人は五蘊假和合なれば、早晚瓦解すべきものなることは明かなり、然かれども有爲轉變の原因とも看做すべき習氣なるものが、根本的に斷滅せられざる以上は、此の潜勢力は再び前の五蘊を集合せしめ、以て後の我なるものを生ぜしむべし、現生に於ける五蘊が刹那々に生滅しつゝあると同じく、現生最後の五蘊の瓦解する一刹那に、後生の五蘊の結合は始まるべし、去れば習氣が根本的に斷滅せられざる限りは、五蘊は生じては滅し、滅しては生

じて、永久に息むことなきなり、此れを迷の境界とは謂ふなり、然り而して宗教の目的は轉迷開悟に在り、斯かる習氣は如何にして斷滅せらるべきかと云ふことは佛教の根本問題となりしなり、此の習氣を斷滅せしむるものは哲學にもあらず、科學にもあらず、常識にもあらず、唯だ絕對不思議の力に投託せる金剛不壞なる大信仰の力なり。

既に此の不思議力によりて習氣を拂ひ盡して觀れば、別に執着すべき五蘊もなく、我もなきことが體得せらるなり、貴下が曇きに示されたる一休禪師の「引きよせて結べは柴の庵にて、解くればもとの野原なりけり」云々の道歌は、右の如き悟道の境界を披瀝せしものに相違なかるべし、悟道の境に住して宇宙を達觀すれば實に斯の如き感想の生じ來たるなるべし、此の妙境は早や既に佛陀に私淑せしものなり、吾人とても、絕對不思議の信念力によりて迷の根本を退治することを得ば、現生の終るや否や即ち假和合の假我なるものゝ生滅は忽ち斷絶せられて、無爲安樂の妙境に歸入すべし、以上の如き道歌は、自己信念の表白なれば、宜しく宗教的の信念の立場より解釋すべきものにして、科學や常

識を以ては判断すべからざるものと思ふなり。

尙最後に一言致したきことあり、神の存在とか、靈魂不滅とか申すことは宗教的信念の上に樹立せるものなれば、他迄論理的に説明し盡すことは不可能のことと思ふ、是れはカントも既に明言せし所なり、科學者は充分なる説明を得て而る後に信仰せんと欲すれども、宗教家は信念の上に腰を据えて而る後に説明を試みんと欲するなり、故に説明の功拙可否の如きは、宗教家に取りては、抑も末技に屬せり、科學者の批評によりて忽ちに動搖するが如き信念は甚だ覺束なきものなり、宇宙の秘奧は到底科學や哲學のみにては把柱すること能はざるは貴下の既に是認せらるゝ所に似たり、去りながら宗教家も、先徳の糟粕にのみ依頼せずして、斬新なる哲學や科學を利用して自家の信念の説明に資すること最も重要なり、但し是れは自家の信念確立以後の事に屬するなり、尙貴下は夙に斯かる形而上問題に思想を鍛鍊せられしことなれば、多分蘊蓄も深からん、餘閑あらば、更に高教を仰ぎたし。

靈魂説に就きて北村君に呈す

石 橋 臥 波

疑に北村君の靈魂論に就いて疑義の存する處を質すこと二回なりしに、常に詳細なる解答を與へられしは深く謝する處なり、然るに最後の高論に於けるものは、君の信仰を最とも明かにせらるゝと共に、論旨も亦終極に近づきしを信ずるが故に、予も聊かこゝに最後の挨拶にかへて所信を述べんとす、君の言はるゝ如く、靈魂論は古來困難なる問題にして、今尙容易に解決を見ること能はず、そは當然の事にして、もしこの靈魂の本質が明かになれる曉には、宇宙の解釋も人生の意義も悉く解決せられて、恰も朦々たる雲霧晴れて玲瓏たる明月を眺むるが如くなるを得べきなり。

蓋し宇宙の解釋についても、其困難なる點は何れにあるかといへば、必竟物質と靈魂との起原本質關係にあり、而して從來これを解釋せんとするに經驗の道筋をたどるものと、思辨の上よりするものとの二派ありて、更に信仰

によりて觀念せんとするものあり、即ち一の對象にてありながら、見る人は各その見方を異にし、一人の娘に三人の婿、何れの掌中に飯すべきか、一は常識によりて最も正確なる彼の言葉動作、さてはレツターによりて彼の意中を探らんとし、一は冷靜なる意志の要求を充さんとし、他は自ら熱せる情を以て彼の意を推す、果して何れに心を寄するか、是を判するに智識を以てすると情を以てするとは、其人の性情の異なるによりて自ら異ならざるを得ず。

凡て人の心は智と情との二極點間に於て波動的活動をなし、意志は常に之が均衡調和をはかるものなれども、人心本來活動的にして久しく平板の状態に靜止する能はず、こゝを以て或ひは情的の一端に高潮を呈し、或ひは智的方面に傾く、この状態は一日の中一生の中皆その軌を一にするものなるも、其人の本質によりて情的に久しく止まるあり、而して社會も亦た個人と同じく智識時代となり信仰時代となり、一昂一下漸を追うて進歩發展すと雖も、智的方面と情的方面との暗流は、常に社會の中に流通せることは、古今を通じて歴史の

證明する處なり。

こゝに於てか常に二個の相反對せる思想のあらはるゝを見る、本邦現時の狀態を察するに亦然るものゝ如し、即ち一方には常識より出立して、經驗に基き正確なる推論により真理を認識せんとするあり、他面には信仰狹義のに基き思辨によりて安住せんとするものあり、手を以て見れば、君はこの後者に屬する一人なるが如し、如何となれば、靈魂不滅、佛陀の存在の如き概念を腦裡より除却する能はず、説明の巧拙によりて信仰に増減する所なし、有爲轉變の原因とも見るべき習氣を斷滅せしむるは、唯、絶對不思議の力に投託せる金剛不壞なる大信仰力なり、宗教家は信念の上に腰を据えて、而る後に説明を試みんと欲するなり、等の言は、信仰を基として、而る後に説明に移らんとするものなればなり。

今の閣臣は動もすれば衰龍の袖にかくれ、宗教家は信仰の裡に坐して、世の文化は如何にもあれ、我は我が信ずる所によりて、一切の行動運命を佛陀の福音に投託す、心胸廓然、心廣く體胖かに、美妙の音は耳朶にさゝやき、靈怪の容姿枕

邊に現はるとなし、白眼他の世上の人を見る、君も亦この信念の上に安住するものなりや否やを知らずと雖も、已に一切の思想行動が、佛陀の存在、靈魂不滅の信仰によりて支配せらるゝ迄に成り居れるからは、必ずや絶対不思議の力を觀じ、佛陀と融合徜徉せるものあらん、この強固なる信念に向つて誰か敢て力を抗せん、されども智と相待たざる信仰は、動もすれば迷信に陥り易く、獨の頭も信心からの誹りを免かれず。

予は常に思ふ、現代科學者と哲學者、宗教家と常に思想の衝突するを免れざるものは、要するに信仰と智識との限界の不明なるが爲にして、將來最も研究の要あるものは、この智と信との關係にあり、而して科學者は常識を基礎とし、その推論は經驗に基き、智の足らざる處は信仰の助けによりて證明説明をなし、以て宇宙を解釋し、哲學者はこれらの經驗を材料とし、抽象に抽象を重ね、思辨を積み、以て宇宙の奥底に到らんとす、其極動もすれば出立せし處を忘れて、自ら己が影を驚くに至る、抽象の弊として、一寸の差遂に千里の誤りを來し、その結論と常識とは相齟齬することあり、こゝに於てか衝突

を來す。

宗教家は初めより信仰の上に立ち、先づ神明佛陀の力にすがり、以て其不思議を觀じ、宇宙の奥底に到達せんことを願ふ、反問す、佛陀本來何ものが作りしか、吾人の心の力にあらずや、然るに心の如何を究めずして却つて之を實在となし、信仰を以て、唯一の頼みとなす、宇宙の真相人間の本质、如此にして如何てよく知ることを得ん、フオン、キルヒマンが曰へる如く、自らの心を以て心を研究するは、必竟臆測を以て臆測を論ずるに均しとはいへ、先づ經驗に訴へて、知り得る限りは之を智識に求め、其知る能はざる所は之を補ふに始めて信仰を以てすべきのみ、之をなすの道は先づ人間の本质を研究するにあり、物といひ、心といひ、將た宇宙人生といふも、皆人間の心ありてのことなれば、心の本质を明かにし、さて物質の本性を究め、以て漸次歩を進めざる可らず。

宗教家は常にいふ、人智は到底宇宙の疑問を解決する力なしと、固より然り、試みに宇宙の原始について、ネビュラ説によるも、その奥底に到れば、雲霧の如き一團の單純なる物質より、如何にして精神の如き活動を生ぜしかは知